



医家芸術 夏季号 目次

59 巻 通巻 623 号 (2015 年度)



邦楽部ニュース……………2

洋楽部・小平ミニコンサート……………4

◇医家随想

ふたもじ（2 文字）の病気
浜名 新 …………… 6

榮久庵先生
出来 尚史 …………… 10

江戸の教養人
豊泉 清 …………… 15

チェーホフを読む（7）
曠野（ある旅の話）
藤倉 一郎 …………… 18

携帯電話
穂苅 正臣 …………… 20

生還！バンザイ突撃に参戦した
軍医中尉（5）

美濃部 幸恵
協力 美濃部 欣平
…………… 22

医芸俳壇 …………… 31

医芸柳壇 …………… 32

医芸歌壇 …………… 33

詩 …………… 35

◇音楽評論

フェレンツ・フリッチャイの苦悩
（ブラームス交響曲第 1 番ハ短調）
みやま みちひと
海山 道人 …………… 37

◇アンコール掲載

『メキシコ・オリンピック
旅行記念』②
日本医家芸術クラブ 編 …… 48
オリンピックやじきた観戦記
岡野 岳郎 …………… 50
クエルナバカとタスコ
中橋 光男 …………… 69

『春のシャンソンの夕べ』開催
白矢 勝一 …………… 74

◇ほ ん …………… 76

クラブ通信 …………… 77

透視像 …………… 78

編集後記 …………… 78



表紙の言葉 …………… 34

原稿募集のお知らせ …… 47

邦楽部ニュース

三月、赤坂「金龍」にて
第二回御座敷懇親会を
開催いたしました



昨年春の御座敷懇親会のご好評を
受けまして、今年も山田先生のご助
力で赤坂「金龍」にて邦楽部懇親会
を開催いたしました。

まだ寒い三月十四日、一人一芸ご

披露下さいとのお願いに、大川先生、
太田先生、川口先生、小島先生、佐々
先生、村中先生、山崎先生、山田先
生がお集まり下さり、各々ご自慢の
唄と舞をご披露下さいました。皆様
お客様をお誘い下さり、総勢十三名
で広いお座敷が一杯、賑やかな夜と
なりました。

さて、乾杯もそこそこに、先生方
はくじで順番を決められまして、
佐々先生が口開けの新内小唄、続い
ては小島杏里先生が「鏡獅子」で舞
をご披露、山崎先生の長唄、川口先
生の小唄と続き、大川先生の舞踊、
山田先生の小唄、村中先生の小唄、
トリは太田先生の小唄「梅は咲いた
か」。

さらにお座敷芸を熟知し、お姐さ
ん方から尊敬までされていると言う
太田先生と山田先生が声色を披露。
締めはお姐さん方総出で奴さん…。

賑々しく夜は更けて行き、あつと
いう間にお開きとなりました。皆様、
お疲れさまでございました。





第六十回邦楽祭は

十一月二十九日

日曜日開催

「参加お申し込み受付中。
新しい先生も大歓迎です。」

十一月二十九日日曜日、例年通り日本橋三越劇場にて第六十回記念邦楽祭を開催致します。日本医家芸術クラブの長い歴史とともに毎秋賑やかな舞台を飾り続けて六十回。還暦の舞台を皆様とともに楽しみたいと存じます。

演目数にまだ余裕がございますので、新規メンバーのご参入、お待ちしております。

お問い合わせは邦楽祭事務局・二村
03-3453-8281・kokkedal@gmail.com
まで、どうぞお気軽にご連絡くださいませ。

洋楽部・小平ミニコンサート 開催！

2015 年 5 月 10 日（日） 15 : 00～

シラヤアートスペース（東京都小平市）にて

洋楽部の有志によるミニコンサートが、5月10日（日）に東京都小平市にあるシラヤアートスペースにて開催された。お馴染みのバンド「はぐどばん」の演奏や、フルート、チェロ、バイオリン、サクソフーン、クラリネット、ピアノ、ギターと多彩な音色が響きわたる素敵なコンサートとなった。特別ゲストにテノール歌手のロベルト・ディ・カンデイドを迎え、迫力ある歌声に会場者も引き込まれていた。コンサート後は軽食や飲み物で歓談の場が設けられ楽しいひとときとなった。



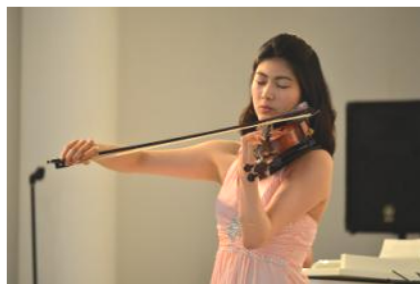
フルート・高野 征夫



チェロ・石川 哲



バイオリン・近藤 敦子



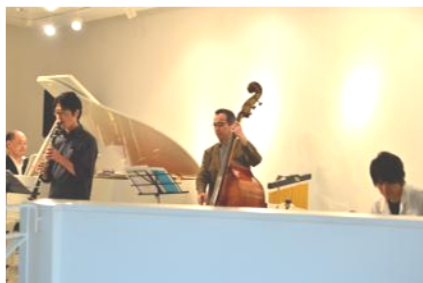
バイオリン・半田 あゆ



サックス・小沢 尚



クラリネット・萩原 博道



バンド「はぐどぼん」



ピアノ・萩野 仁志



テノール
ロベルト・ディ・カンディド



ギター・白矢 勝一
玉澤 明人



医家随想



ふたもじ(2文字)の病気

浜名 新

多摩モノレール脇に僕が勤務する慢性期型の療養型病院がある。モノレールの駅から病院まで歩く場合、M駅からだと約5分強、一方、距離があるK駅からだと約12分要す。僕は天気が良い日、多少、出勤時刻に余裕があれば、健康維持を考え、K駅からテクテク歩くことにしている。街歩き要領で、周囲を観察し、四季に応じた新たな発見もある。

K駅を降り、市道沿いに送電線を

つなぐ、高く聳え立つ鉄塔が等間隔で設置されている。ある時、鉄塔上で作業する場面に遭遇した。電気工事人たちは、命綱を体と鉄塔に巻きつけ、足場を固定し、左右の手で仕事をしていた。彼らの眼や耳の機能は健全で、平衡感覚が優れ、足腰も身軽で、経験をつまないと勤まらないだろうと思った。

雨が降らなければ、土曜日、広い空き地で、地区の少年野球チームの練習が行われている。野太い元気の掛け声が響いてくる。監督推薦で対外試合に選手として選ばれれば、得意満面であらう。規律は厳しく運営

されているにちがいない。

この辺りは繁華街から離れ、個人所有の農地、雑草が茂る市有地が手付かずにある。農地の所有者が亡くなると、遺産相続で宅地に申請・変更して売り出されるのか、広大な農地の一角に、戸建てが4棟次々に新築されて数年が経つ。

畑ではレタス・白菜・キャベツ・ほうれん草・春菊・ねぎ・京菜・トマト・なす・とうもろこし・ジャガイモ・人参・ごぼう・玉葱・サツマイモ・里芋・麦などを栽培している。

農家の主は畑を耕運機で耕し、石灰を撒き、肥料を与え、種まき・苗植えし、散水で水枯れを防ぎ、草取りをして作物を育て収穫する。専用の小屋に採りたての野菜を無人販売1束100円也の値札が・・・。

中年・老年の男女が、時に、農業ボランティアとして、草取りの手助

けをしている。

梨畑では秋口、防虫袋を外し、丹精こめて育てた梨を収穫する。

1月頃、自由自在に伸びた途長枝を剪定、定期的に地面を耕し、除草、肥料を与え、3月の芽吹きに備える。3月末から4月に、清楚で花びらの厚い5弁の白い花が咲き乱れると、上向きの花を落として受粉させ、着果させ、敷地内の井戸から水を撒く。ある程度、実のサイズが大きくなると摘果し、径3cm程度に成長すると防虫袋をかぶせ、数ヶ月、果実の成熟を待つ。役割を終えた老木を抜き、植え替えられた若木がすくすくと育っている。人為的に樹木の新陳代謝は必要に違いない。

鉄塔沿いの市道沿いで150メートル×25メートルくらいの土地に、同一業者に建売された20数棟の戸建がある。30坪強の土地に同じ様な

造り・器材を使用した2階屋である。そのほか、別個に新規に建てた個人の居宅、アパートなど数棟ある。新築の建売居宅を購入したのは新婚数年の若い夫婦が中心のようだ。何故なら、戸建ての前の市道で遊ぶ子供たちは、幼稚園児や小学生が多いからである。どの家にも自家用車が駐車し、夫婦で運転するようである。

僕がK駅から病院まで歩き始めたとき、前記の建売住宅の土地に4棟分の更地があった。5年前の秋口か、同じ業者がまず2棟を建て始めた。市道に面したA棟、A棟に隣接した奥のB棟である。地鎮祭が行われたとは思いが、記憶にない。基礎工事、建築の土台になる溝が掘られ、生コンが流し込まれ、固まると、基礎工用の仕切り板が固定され、再び生コンが流される。コンクリートの土台に仕切られた裸の地面は、厚

手のビニールで覆われ、生コンでカバーされる。建物の四方の土台になる木材の下に、黒っぽい強化ゴム？の器材が設置されることが、条例による地震対策で義務付けられているのであろうか。再近、上棟式が行われているのか否か不明であるが、注文住宅では行われているのかもしれない。2階建てに必要な建築資材が運び込まれ、重機が搬入され、助っ人が駆けつけ、瞬く間に住宅の骨格が出来上がる。天気が危ういと、屋根板をすばやく設置する。大昔では考えられなかった光景である。大昔、田舎では建前の日に、建て主が紅白の餅・小銭・菓子類を投げ撒く習慣があった。祝いもちは焼いて食べてはいけないそうだ、――火事などのたたりが起きるからと。水回りの管、暖房用の配管など次々と設置され、外装、細かい内装が終了すると、入

居を待ち望んだ住人が引つ越してきた。その後、違ふ業者が新たに2棟の新築工事を始め、4か月ぐらいで完成させてしまった。建築士の設計通り、建材工場で、建材のプラス・マイナス、正確に木材の裁断が行われ、寸プンの狂いもなく見事に出来上がるのは、確かな技術に他ならない。

K 駅から徒歩通勤するようになった、ちよつとしたきつかけで、A棟の住人と挨拶するようになった。ご夫婦で住まれ、駐車場には軽自動車が留め置かれ、歳格好から現役を退き、今回、新築住宅を購入し、余生を過ごそうとしているに違いない。数年前、あるすがすがしい朝、通勤の往路で、僕は、たまたまA棟の戸主が、前の道路に出て朝日を浴び、気分転換している場面に遭遇した。だが、主は松葉杖を使い、ソロリ、

ソロリと歩いていた。僕は気になり、思わずお声をかけた。

「おはようございます」今からお勤めですか「はい、その病院まで」「え！ 病院ありましたか」「どうなされました」「事故で右の踵（かかと）を骨折して、T市の病院で手術をしました。まだギブスが外れなくて。松葉杖を使いリハビリ中です」「かかとの手術は大変でしたでしょう」「でも、2週間で退院させられました。松葉杖を使い慣れなくて・・」「移動なさるのが大変ですね」「まだ、痛みがあります」

見ず知らずの通行人から、何気ないちよつとした挨拶から、住人は返答をかねしてくれ、会話がつながった。ご主人の風貌と話しぶりから、僕と同じくらいの年齢と推測した。なるほど、右かかとは白い分厚いギブスが巻かれ、かかとを地面につ

くの痛みが走るのか、松葉杖でかかとに加重がかからないように浮かしている。松葉杖を使い、ゆっくりとした慎重な足運びである。別れ際、「お大事にして下さい」「お氣をつけて、行つてらっしゃい」この日の挨拶をきつかけに、A棟のご夫妻と通勤の行き帰りに挨拶を交わす間柄となった。

奥さんは花好きなのか、居宅前の坪庭には、花の鉢植えがずらりと並んでいる。水撒きは朝が原則であるが、夏においては、夕方にも散水しなければならぬ時もあるようだ。植物が水枯れでぐったりしてしまうときに必要である。帰り道、奥さんがじょうろで植木鉢に水をまいていくところに遭遇した。「こんばんは。花の手入れですか」「こう気温が高くと花が枯れてしまいますから」「そうですね。近頃すごく暑く、熱帯夜が

続いております」「お気をつけてお帰りください」「ありがとうございます」ご夫婦ともども如才なく、通行人に接してくれた。

あるとき、ご主人が運転し、助手席に奥様が座り、まさに出発しようとしていたところに遭遇した。挨拶すると、ご主人は「いやね、持病の糖尿病で、これからT医療センターまで薬をもらいに・・」「F市でしよう。道中お気をつけ下さい」「ありがとう」車は勢いよく走り去った。高齢になれば、多くの人は持病を抱え、健康維持の面から、病院通いしている。おそらく引越した直後で、かかりつけ医もままならず、多少遠方でも、今まで診てもらっていた馴染みの先生から、薬をもらいうほうが、すごく安心に違いない。

ある年の師走から松が明け、2月になってもご主人と行き会う機会が

なかった。たまたまなのか、釈然としないまま、日時が過ぎていった。ひよつとすると暖かい外国でロングステイしているのかも・・。

春めいた3月か4月頃か、ある朝の出勤時、奥様とたまたま行き会い、話のやり取りから、ご主人に異変が起きたことを知った。

「ご主人をお見かけしませんが・・」「主人はね、ふたもじの病気で、あつてなく亡くなりましたの。ここで余生を送るつもりで・・」「ふたもじの病気とは、ガンでしょう。何かきざしでもありましたか・・」「いいえ、それがぜんぜんありませんの」「どこ部位のガンで・・」「肺にできたガンで。病院で画像診断を受けると、先生からいきなり余命いくばくも無いといわれてしまい・・」「タバコを吸われましたか?」「いいえ」「いきなり寿命を宣告されれば、途方にく

れましたでしょう」「症状でもあれば、病院へ行かせたんですが・・」「足の手術の時には異常なかったのでしょう」「はい。ですから、1年くらいで、ガンが育ったことに・・」「暮れからご主人とお会いしませんが、心配しておりました。苦しまなかったですか」「ええ、痛みは無かったですね」「ガンは注意していても、ひそかに忍び寄るのですね」「ふたもじの病気は嫌ですわ・・」「お相手がいなくなりさみしいですね」「わたしね、車の運転、できないでしょう。ですから買い物が大変不便になり、慣れない自転車で、事故らないように苦労しています。買い物が一番つらいですわ」「遅れましたが、謹んでお悔やみ申し上げます。お気を落とさずにして下さい。失礼します」「お気をつけに行つてらっしゃい」

僕は病院に着くまで、2文字の病気で鬼籍に入った知り合いの人々を想いだそうとした。その姿・風貌は、年々、茫々としてきた。亡くなる経過は、発症したガンの種類、部位（臓器）によりマチマチであろう。長寿社会になり、現在、2人に1人がガンに侵される時代だという。どの治療法を選択するかは、各人の意思が優先するだろう。療養型病院でのガン患者の終末期医療の体験から、悪性の進行ガンに対しては、医療が進歩しても、まだ、太刀打ちできない……。

(H 27、4)

榮久庵先生

出来 尚史

「君の絵には影がないね」

「……」

「もの自体はかなりよく描けているが、影がない。影をつければもっと絵が生きてくる」

「はい……」

身の回りにあるものをスケッチしてくるように、というのが夏休みの宿題だった。私は迷った末、使い慣れたピッケルなど登山用具二、三点を描いて提出した。冒頭のコメントはその時先生から頂いたものである。影を付け忘れたのではない。何度やってもうまく描けなかったのだ。わずかに混じった苦味を味わいながら、当時のことを懐かしく思い出している。

去る二月八日、榮久庵憲司先生が亡くなった。我が国工業デザイン界の開拓者であり、戦後の復興期から今日まで斯界をリードし続けてきた巨匠であった。手がけた作品は、日用品、家電、楽器、オーディオ、乗

り物、パッケージ、サイン、ロゴマーク、と多岐に亘る。例えば、山本山の海苔、ハーゲンダッツのアイスクリーム、ネスカフェのコーヒール。電車なら山手線、中央線、特急あずさ、成田エクスプレス、秋田新幹線こまち。東京都のシンボル「イチヨウ」マーク、コスモ石油、ミニストップのロゴなど……。

先生が東大工学部に講座を持ったのは昭和四十二年。私は三期目の学生に当る。講義は機械工学科の建物で行なわれた。機械系学科の共通授業ということで、私たち航空学科の者も聴講できた。講義の名前はたしか「機器意匠」であったと思う。片仮名で「インダストリアル・デザイン」としないところが時代を反映していて面白い。

「講師の先生は坊さんらしいよ」と誰かが言った。お坊さん？ 僧侶と

デザイナーでは、どう想像してみてもイメージが合わない。冗談だろうと最初は思った。

教室に入ってきた先生を見てびっくりした。工学部の他の先生方とはまるで雰囲気が違うのだ。穏和な表情、深みのある声、聞き手を包み込むような話しぶり。なるほど、お坊さんといっても不思議ではない。私たちは知らず知らず先生の話に引き込まれていった。

学生の噂は本当だった。榮久庵先生は曾て僧職にあり、そこからデザインの道へと転じた異色の人であった。故郷の広島が原爆で壊滅した。それを目の当たりにして、もの作りによる再生を心に誓ったという。東京芸術大学在学中にデザイングループを立ち上げ、卒業後はGKインダストリアルデザイン研究所の所長として本格的な活動を開始した。私た

ちが教わった時にはすでに、ピアノ、カメラ、自転車、スクーターなどのヒット商品を世に送り出していた。

学生は世事に疎い。とりわけ私は蒙昧である。醤油卓上瓶の代名詞ともなったキッコーマンの瓶、あれが誰であろう先生の作品、と知ったのはずいぶん後になってからだ。

講義は「もの作り」の基礎——材料、成形、形態、色彩の話で始まり、人間工学、品質論へと進んでいった。具体例を挙げながらの解説はわかり易かった。通常、工学部の講義には数式がつきものだ。教官は黒板の左上から右下まで、書いては消し、書いては消しを繰り返す。学生は数式の洪水に溺れ、いつしか現実社会との接点を見失う。その点デザインの世界は違うように思えた。

無論、機器の制作には綿密な計算や設計が必須だ。しかしそれだけで

は「もの」は形として現れてこない。製品として生まれる前にどうしても通らなければならない「門」がある。

デザインという「門」だ。すべての完成品の影にデザイナーが貼り付いている——社内の者であれ、委託された外部の者であれ——。普段は表に出ることのないデザイナー、だがその魂は作品という形をとって明白に現出するのだ。日を追うに連れてそのようなことが私にもわかるようになってきた。

受講生はデザインの世界に初めて招き入れられた客人だった。全員が将来その分野に進むわけではなかったろう。それでも客人である私たちは神妙に耳を傾け、主人である榮久庵先生は客ひとりひとりの顔を見ながら楽しそうに語った。話に芸術論的色彩が混じってくると教室の熱気は上昇する。ただし、内容は抽象的

でやや難解。

「すべての人為形態は人間が自然を模倣するか、自然からヒントを得て造形活動を行ったものといえる」

茶室で使われる茶筌や茶碗は、自然を手本とした人工美の極致である、と先生は称賛していた。

「自然そのものではないけない。自然から形を抜き取り、フィードバックする」

このフィードバックという言葉がわからなかった。余分なものを可能な限り削ぎ落とした造形によって自然を表出する、という意味であつたのか。

「フォルムの簡潔さ、正しさは見る者に喜びを与える。我々はそれを美と呼ぶ」

「頭脳を外界に向けて開いた状態にしておくこと。行動様式が固まるのは避けなくてはいいけない」

「豊かなもの、正しいものに目を向け、常に美を求める。エンジニアの心掛けるべきことはまさにそれだ」

その年の秋に先生の著書が出版された。『道具考』（鹿島出版会）。道具と人間との関わりを深く掘り下げたこの本は、現代文明への鋭い批判書であり、同時に、私たちに向けた未来への道標ともなっていた。教室では語られなかった内容も多く含まれている。全部で十一章ある。それぞれ章の頭には「発意」、「断と縁」、「如意」、「坐歩臥」、「授受一環」など仏教用語が配され、著者自身による手書きのイラストが添えられている。

以下、重要と思われる箇所を抜粋して要約を試みよう。

「人類による道具の発見以来、道具の世界は人間の世界に寄り添ってきた。道具は人間の生活環境を変貌さ

せ、人間の意識と行動に影響を与えて進化を促す。人間発展の歴史はすなわち道具発達の歴史でもあった」

「人間の欲望には際限がない。これが人間世界を成長させる力であるが、一方で制御を失えば人類を滅亡へと追い込む力ともなる。道具を作るのも使うのも人間である。人間の欲望に合わせて道具の世界は際限なく膨張してきた。結果として道具世界は混乱し、現代に見る都市の荒廃や諸環境の不調和につながった」

ここまで来れば、次には人間の欲望を否定し、過度の道具作りを諫める言葉が続くと予想されるが、そうではない。

「欲望そのものは人間に内在する力であり、人類進歩の原動力である」

「いかなる道具にも創造の根源、人間の叡知の極限が潜んでいる」と肯定的に述べ、

「これを迎えることが今日の人間の務めである」とする。道具世界の構築にあたっては、

「道具のもつ変革能力を正しく評価し、しかるべき方向性を与えることが重要となる」

それでは、しかるべき方向とは何か？

「道具は道（みち）の具（そなえ）と書く。道というのは人倫の大道のことである。また如意の意を意味する。道具が意の如くあるためには意そのものに意義を見つけないければならない」

道具世界に対する人間には高邁な精神が要求される。

「道具は人の心を映す鏡である。人の姿が正しく本来の姿に立ち返れば道具の姿も自ら高まってくる」

また「利他」という言葉も出てくる。他を利用することは回り回って自

らを利用することにつながる。

「人々が手をつなげて一つの環につながれば、利する心はその環を流れ回転する。この精神風土で育ち成長すれば自ずと人に豊かな風格が生じる。この基盤があつて初めて道具世界は魅力ある生命体として人間のために活動を続けるだろう」

そして言う。

「正直で地味な積み上げと消えることのない人の慈しみを持つて、今日に、また未来に誇りを持てる道具文化を築きたい」

私の力不足で皮相的な解釈に留まつてしまったことは許してもらわねばならない。それでもここに上げた言説の数々が先生の創作活動のバックボーンであり、後に続く私たちに向けた力強いメッセージであつたことに間違いないだろう。

私は大学を卒業した後、自動車メ

ーカーに就職した。しかし在職期間はずか二年。もの作りのイロハも学ばず、当然のことながら先生の教えを活かすこともなかった。不肖の弟子第一号である。

もの作りの世界から離れて久しい。今では脳の中身もすっかり変わってしまった。痕跡を留めているとすれば、それは道具や機械を見るとき「眼」であろうか。どのような工夫が凝らされているか、どのような考えのもとにこの形は生み出されたのか——いつの間にかこんなことを考えている。日ごろ見慣れた製品にも新しい発見はあるのだ。使う側から作る側へ、視点を変えるだけで世界は違つてみえる。それがまた楽しい。昭和が終わつて平成になつた。新聞でたびたび榮久庵先生の名前を見かけた。デザイン活動を通じての文化への功績が高く評価され、国内、

国外での受賞が続いたためだ。記事になるたびにキックマン卓上瓶の写真が出てくる。これには苦笑した。空前のベストセラーとはいっても昭和三十六年の作品だ。その後の創作の方が質も量も圧倒的にスケールが大きい。醤油瓶を馬鹿にするわけではないが、「榮久庵、すなわちキックマン」なる一対一対応はいかにもメディア的で、情けなかった。

個人的に言わせてもらえば、先生の作品の中ではヤマハのVMAXが好きだ。流れるようなフォルムというのではない。V型4気筒一七〇〇ccのエンジンをきつちりと納めた重厚感がなによりも素晴らしいのだ。この形状なら高速の空気には負けない。後方に向かって無理のない流れを作り出せるだろう。強い接地力で安定した加速が得られるだろう、と心が弾む。残念ながらそれを確かめ

る機会は私には訪れなかった。大型自動二輪の免許は早いうちに取ったが、バイクとは縁の遠い人生だった。このことは私の後悔リストの上位に位置している。

榮久庵先生は最近では都市づくり、街づくりにも力を入れていたようだ。道具と人間とが調和する空間、安らぎのある美しい都市景観の実現を目指して、街路や広場、サインなどの設計を手掛けてきたという。生活環境の整備は地球規模の環境改造へと広がっていく。今やGKデザイングループは海外に四つの拠点を擁する国際的な創造集団である。その活動に国境はない。豊かな世界づくりに、地域性を重視しながらも、政治、宗教の枠に縛られない取り組みが必要とされる。

もの作りの原点を見つめ、人間の正しいあり方を探る先生の旅は、ま

ことに壮大な精神世界、物質世界へ至ろうとしていた。一昨年インタビュウの最後にこう言ったという。

「やりたいことはまだたくさんある」
八十五歳といえば、功なり名を遂げて引退も良しとする年齢だが、先生の場合は「道、未だ半ば」の気持ちだったろう。それでも、心残りとか未練とかという言葉は先生には似合わない。きつと今頃はここよりもはるかに広い世界にあり、創作意欲を全開にして新しい仕事に取り組んでいるに違いない。

朝は太陽神のチャリオットを造り、夕はかぐや姫の牛車に工夫を凝らす。神々のオフィス、貴人の住居空間を整備し、さらには天界の環境大改革に挑む。パワーを漲らせて奔走する先生の姿が見えるようだ。遠からず活動報告が地球へと配信されることだろう。メールの最後にこんな文を

添えて——「そちらの様子はどうか？」さあ大変だ。「ここは大丈夫です。地球のことは私たちに任せて下さい」こう元気に答えたい。

今日の科学、技術は猛烈な勢いで進歩し続けている。それに裏打ちされて夥しい数の「もの」が生まれ、そして消えていく。量だけでなく質の変容も凄まじい。「人が道具を変え、道具が人を変える」というが、両者の歯車は既に噛み合っていないようにみえる。無為に流されてはいけない。果てしない負の連環に巻き込まれる前に踏み止まり、よくよく考えるべきであろう。「もの」を作る人を使う人、双方の勇氣と叡智が試されている。そう私は考える。

榮久庵先生の教えは深く、私たちに課せられた宿題は重い。

江戸の教養人

豊泉 清

色男 金と力は 無かりけり
大男 総身に知恵が 回りかね
孝行の したい時分に 親は無し
町内で 知らぬは亭主 ばかりなり
女房の 妬くほど亭主 持てもせず
泥棒を 捕らえてみれば 我が子なり
皮一枚 剥けば美人も 髑髏（され
こうべ）

大勢の人に親しまれていて、あたかも成句や慣用句のように口にする江戸川柳がいくつもある。「孝行をしたい時分に親は無し」を、現代の長寿社会には「孝行をしたくないのに親が居り」と詠み換える親不孝者もいる。惚れ惚れするような美人でも顔の皮を剥けば不気味な髑髏である。ではここから私が大いに興味を抱い

ている中国の故事を題材にした江戸川柳を紹介してみたい。

おつかさんまた越すのかと孟子言

孟母三遷の逸話を踏まえている。孟母は息子の教育に相応しい場所を探して三度も引越したという故事を揶揄している。

救医者之友は遠方より来る

論語の「有朋自遠方来、不亦樂乎」が即座に連想できる。近所の人はない。診察を受けに来るのは遠方の患者ばかりである。「救医者之友」は患者を指している。

過って憚らず来るふてえ奴

やはり論語の過則勿憚改（過てば即ち改むるに憚ること勿れ）を下敷きにしている。

月落ち烏鳴いて女房腹を立て

月落烏啼霜滿天、江風漁火對愁眠

……という漢詩の一節が織り込まれている。夜遅くまで起きていて亭主の帰りを待っているのに、夜遊びに熱中しているのか、なかなか帰ってこないと女房がご立腹である。

人同じからず花見の仲間割れ

年年歳歳花相似、歳歳年年人不同
という漢詩の一節が織り込まれている。花見の宴会で酒に酔って喧嘩が始まった。

長い詩のそばに空き樽と空き徳利

唐代の李白という詩人は酒豪としても鳴らした。同時代の杜甫という詩人が「李白一斗詩百篇」と詠んでいる。李白は酒を一斗飲むと詩を百篇も詠んだ。一斗は約18リットルに相当する。李白の部屋には常に空き樽や空き徳利がごろごろ転がっていた。

見世物にしたい白髪を詩につくり

李白が白髪三千丈、縁愁似箇長：

……という詩を詠んでいる。三千丈と言えば、長さが約9キロメートルの白髪である。誇張表現の横綱格である。

始皇帝書字を奴に出せさせ

秦の始皇帝は学問の書物を焼き捨て、学者を生き埋めにした。焚書坑儒と呼ばれる暴政である。その結果、字も満足に読めない高位高官が続出した。

足音がすると論語の下に入れ

真面目に漢文の勉強をしているふりをして、実はエロ本を読んでいた。人が近付いてくる足音が聞こえたので、慌てて漢文の本の下にエロ本を隠した。

冠を直さぬ場にて一つもぎ

「李下に冠を正さず、瓜田に履（くつ）を納（い）れず」という漢文がある。李（すもも）の木の下で傾いた冠を直そうと思つて両手を挙げる

と、李を盗むのかと疑われる。瓜畑で靴の紐を結び直そうと前屈みになると、瓜を盗むのかと疑われる。人に疑われるような行為はするなという戒めである。「冠を直さぬ場」とは李の木の下である。冠を直さずに果物を一つ失敬した。

ではここで趣向を変えて日本史の故事を詠んだ江戸川柳を披露してみたい。

古池のばちやんが来世まで響き

松尾芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」を題材にしているなと瞬時に理解できる。

玉虫は老ない役を言い付かり

屋島の源平合戦の際に、平家軍から一艘の小舟が源氏軍に近付いていた。舳（へさき）に扇が掲げてあり、乗っている女官が「矢で射てみよ」という身振りをした。源氏軍の弓の

名手の那須与一が見事に扇を射抜いた。平家の女官の名前が玉虫である。もし与一が矢を射損なえば玉虫が即死という場合もあり得るから、まことに危険な役割である。

山伏に釣鐘一つ寺の損

若い修行僧の安珍に清姫という娘が恋をしたが、安珍は修行中の身なので女を遠ざけた。清姫は逃げる安珍を執拗に追いかけた。安珍は道成寺の釣鐘の中に隠れた。清姫は大蛇に変身して釣鐘に巻き付き、安珍を焼き殺した。釣鐘が高熱で溶けてしまったので寺は大損である。安珍・清姫の激しい恋物語は歌舞伎の代表的な演目にもなっている。

四日目は明智日陰の守となり

明智光秀は織田信長を倒した数日後に、豊臣秀吉に倒されたので、三日天下という言葉が生まれた。光秀は日向守（ひゅうがのかみ）だから、

四日目以後は日陰守（ひかげのかみ）と揶揄された。日向（ひなた）と日陰が対になっている。

あくる日が夜討ちと知らず煤を取り

江戸の町は12月13日が大掃除の日と決まっており、江戸中の民家が一斉に大掃除をした。「煤を取る」は大掃除を意味する。忠臣蔵の見せ場である赤穂浪士の吉良邸討ち入りは12月14日だった。翌日が討ち入りとも知らず、吉良邸でも恒例の大掃除をしていた。

遠慮してひんとは鳴かぬ佐野の馬

佐野源左衛門は大雪の晩に旅の僧侶を泊めたが、貧しくて客をもてなすものが何も無いので、大事な盆栽を伐り、囲炉裏で燃やして暖を取った。謡曲「鉢の木」の題材となった逸話である。旅の僧侶は鎌倉幕府の北条時頼だった。佐野家で飼われている馬は、主人があまりにも貧しい

ので、遠慮して「ひん」とは鳴かない。馬の嘶（いなな）きの「ひん」と「貧」の掛詞である。

九十九は運び一首は考える

藤原定家が小倉百人一首を編纂した。九十九首は他人の作品を選んだが、自分の作品も一首だけ入れた。定家が詠んだ和歌は「来ぬ人を松帆の浦の夕風に焼くや藻塩の身も焦がれつつ」である。

霞から秋風までは長い嘘

京都に住む能因法師は、東国の旅に出ると偽って自宅に引き籠った。そして旅先で詠んだと称して「都をば霞と共に立ちしかど秋風の吹く白河の関」という和歌を披露したが、後に嘘が露見した。

秋はさぞやかましかりう毒探さん

喜撰法師が「我が庵は都の辰巳鹿ぞ住む世を宇治山と人は言うなり」という和歌を詠んでいる。鹿は秋に

なると鳴く。「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき」という猿丸太夫の和歌もある。秋になると鹿の鳴き声がさぞやかましいだろうと川柳子が想像している。

雨乞いも袖乞いもして名を残し

小野小町は雨乞いの和歌を詠んで雨を降らせた。絶世の美人で教養も豊かだったが、晩年は乞食同然の境遇だったようである。袖乞いは乞食のことである。

実のならぬ花で実のある返事なり

大田道灌が狩猟の最中に夕立に見舞われ、雨具を借りに近くの農家に立ち寄ると、その家の娘が一枝の山吹の花を盆に載せ、無言で道灌に差し出した。「七重八重花は咲けども山吹の実の一つだに無きぞ悲しき」という古歌に託して、お貸しする雨具が無くて申し訳ないと伝えたつもりだが、道灌には通じなかったという

逸話がある。「実の」と雨具の義（みの）の掛詞を利用している。

江戸庶民は漢文や和歌や俳句や歴史上の人物の逸話などに精通していたことが、これらの川柳から窺い知れる。寺子屋という教育制度のお陰で文字や読書に親しむ習慣が涵養されたに違いない。江戸庶民は現代人よりも遙かに教養が豊かで、文学的な知識を駆使して川柳をひねり、精神的にも潤いのある日常生活を送っていたに違いないと、私は江戸川柳を鑑賞しながら驚嘆している。

チエーホフを読む（7）

曠野（ある旅の話）

藤倉 一郎

チエーホフは本来、ユーモア雑誌に短編小

説を書いていたが、1886年27歳の時、老大家グリゴロヴィッチから激励の手紙を受け取り、はじめて本当の文学と自分の才能を認識して小説を書き始めた。そして初めて書いたのがこの長編「曠野」である。風俗描写だけでなく、心理描写もできるようになったと言われている。チエーホフはこの作品に強い意気込みと不安を持ちながら書いた。グリゴロヴィッチは1840年代に写実的な小説で一躍文壇に名をなした作家で、ツルゲネフと並んで当時のロシア社会の目を苛酷な農民の生活に向けさせた作家で、名たる作家が一線を退いた後、1880年代に文壇の重鎮として君臨した。

商人クジミチヨフの妹の息子9歳のエゴールシカが市の中学へ入るための旅の物語である。古ぼけた、薄汚れた馬車には羊毛商人のクジミチヨフとフリストフォル神父とエゴール

ルシカの3人がのり、御者はデニスカだった。なつかしいN市の風景がすぎると、曠野だった。エゴールシカは何のために行くのかよくわからなかったので、悲しかった。母がエゴールシカを中学に入れたというので、兄のクジミチョフに頼み込んで、中学へ入るために遠い市へ行くのであった。フリストフォル神父が、「心配ないよ、学問をしに行くんだから」と慰めてくれた。

曠野は退屈で、炎熱のなか馬車にゆられていた。小川のとりで弁当を食べ、クジミチョフと神父は馬車の下で昼寝をした。エゴールシカはデニスカと走ったり、虫を捕まえたりしていた。しばらく休憩した後出発して夕暮、旅館に着いた。家具もろくにない質素な旅館だった。クジミチョフの羊毛を運んでいる荷馬車隊は今朝ここを出発し、もう一組

は夕方出発したということだった。クジミチョフとフリストフォル神父は金勘定をしていた。先発の荷馬車隊に追いついたクジミチョフはワルモーマフという大商人に会うためにエゴールシカを荷馬車隊にあずけ別の道に行くことになった。

荷馬車隊には6人の御者がいたが、それぞれかつてはそれなりの生活をしていたが、今は落ちぶれてこの仕事をしているのであった。少年の目の前で刻々と変化する豊かな曠野の自然が、少年の目を通して描かれている。旅の途中でドウイモフはエゴールシカにいじわるしたのでエゴールシカは彼を憎んでいた。休憩して食事をするときみんなで魚をとり、それを料理して食べたり、暑い日中はゆっくり休憩して、夕方出発した。エゴールシカは馬車の荷物の上に乗って、孤独な旅をつづけた。夜中に

焚火をしながら、荷馬車隊仲間のパントレイという老人の怖い話をいくつか聞いた。そこへ見知らぬ男が野雁を撃ち落としたから、買わないかと言ってきた。彼は結婚したばかりで、嬉しくてそれがしゃべりたくて仕方ない様子だった。でもエゴールシカはなぜ結婚するのか、なぜ女がいるのか、よくわからなかった。

小休止のときドウイモフが仲間のエメリヤンにからんで喧嘩になりそうだった。ドウイモフは良家の生まれだったが、癩癩もちで短気な性格だった。

ひどい雷雨に襲われてずぶぬれになったエゴールシカは寒気がして、嘔吐し、熱が出てしまった。栈橋の近くの商人宿に泊まることになったが、そこには伯父クジミチョフとフリストフォル神父とデニスカが既にきていた。エゴールシカはほっと

した。そして神父がバターと酢を全身に塗ってくれたので、なんとか落ち着いた。

クジミチヨフ叔父はエゴールシカを預けることになっている妹の友達のアスターシャ・ペテロヴィナをあちこち探してようやく探し当てた。そして月10ルーブルの送金でエゴールシカを中学にやつてくれるように頼んだ。クジミチヨフ叔父はエゴールシカの中学入学の手続きをして帰った。エゴールシカは見知らぬ土地に一人置き去りにされたような気がして悲しかった。エゴールシカの生活はどんなになっていくのであるか。

旅の途中のエゴールシカという少年の目にうつった曠野の情景が鮮やかであり、孤独な少年のわびしい想いが読み取れる。クジミチヨフ伯父

やフリストフォル神父や御者のデニースカの心理描写も生き生きとしており、荷馬車隊の御者の一人一人の性格や表情まで細かく描かれている。少年の目に映る大人の世界の現実が厳しい。はげしい雷雨の中の旅は少年だけでなく、だれもが大変だった。少年はこの苛酷な環境の中で病気になる、落ち込んでいるとき、伯父や神父にあいねんごろに手当てを受けてほっとした。文句を言いながらも伯父は少年の身の上を案じ、妹の友人をやつと探し当てて、中学に入る少年をあずけて帰るのである。少年の心細い心情が読むものに伝わってくる。

携帯電話

穂苅 正臣

むし暑い夏の日にはゴルフ場へ出かけると、あるできことをかならず想い出す。以前、勤めていた会社の同僚と一緒に行った栃木県のゴルフ場での出来事である。

それは今から25年も前の八月のこと、午後になると、特に蒸し暑さが感じられた。16番ホールを終え、次のホールへ向かう途中で、突然、友人が、

「気分が悪いのでゴルフをやめて、休みます」

と言ったのである。もうすぐ午後のはーフも終わるのに、と思ったが、彼の口調の真剣さからして、

「休んだほうがいいよ」

と私は答えた。その時運よく、ゴ

ゴルフ場の巡回自動車を通りかかり、彼を載せて走り去った。

いつものようにブレイを終えた私は、クラブハウスにいるはずの彼を探した。しかし、どこにもいないので、ゴルフ場のデスクに聞くと、近くの診療所へ行った、とのこと。その診療所に電話を掛けた。すると、

「今、点滴をしています。もうじき終わるのでゴルフ場へ戻ります」

というのが看護師の返事であった。帰って来た彼は、いつものような元気がなく、

「今日はここに泊まる」

と言った。心残りではあったが私は彼を残して、帰宅することにした。翌朝、早速ゴルフ場へ電話をかけた。支配人が言うには、

「どこかに入院させないと駄目です」
近くの病院には知り合いの医師もいなかったが、少し離れている某病

院に後輩がいるのを思い出し、彼に頼んでそこへ緊急入院させてもらった。

それから三日後、電話が病院から会社にかかってきた。知り合いの医師が云うには、

「彼はもう駄目なようだ」

聞いた途端私は、

「そんなバカなことがあるか、あんなに元気だったのに」

と思った。だが、私はすぐさま会社の看護師さんと一緒に自動車で病院のある宇都宮へ向かって高速道路を突っ走った。

ベッドに横たわる彼は一昨日一緒にゴルフをした時とは全く様子が違っていた。意識は朦朧として声はか細く、全身にむくみがあり、全く別人だった。そして家族さえも彼をあとからめている様子である。私は「大学病院に救急車で運ぶ」と家族に話

した。

その頃、私の自動車には携帯電話が設置されていたので、大学の各内科の教授に、「彼を何とか助けてくれ」と車内からお願いした。彼は救急車で二時間近くかけて大学の急患室に運ばれた。そこには各医局から動員された多くの医師で患者が見えないぐらい集まっていた。

その頃は、都心の大学病院の医師は、日射病、とか熱中症とかの患者を診る機会がすくなかったのである。彼はあらゆる症状を示していた。いわゆる多臓器不全である。腎不全、肝不全、心不全、呼吸不全があり、血液検査でも異常値が現れていた。友人の教授が「農薬でも飲んだのでは」、と言ったほどである。

排尿も診ないで点滴を続けたのか、体重は5キロほど増えていた。そこで一週間かけて水抜きの人工透析と

パルス療法などが行われた。

重症の熱射病では60—80%の高い死亡率が報告されているが、彼は奇跡的に後遺症も残さずに助かった。親しくしていた友人達は元氣になった彼を見て喜んだ。一番喜んだのは家族であろう。

彼は、倒れる以前の一ヶ月間は仕事が大変忙しく、ホテルの部屋に籠りつきりで仕事をしていた。彼が倒れた日は特に暑かったが、昼の食事はスイカを食べ、生ビールをジョッキで飲んでた。水分は充分に摂ってはいたが、アルコール摂取と疲労、急激な蒸し暑さが彼の倒れた原因だったと思われる。

その頃は今と違い、熱射病というものにそれほど関心がなく、患者の発生も少なかったであろう。彼の入院時の記録は何回も学会に発表さ

れている。

ある日、そんな彼から電話があった。彼は現在会社を辞めて一人で会社を興し勤めている。どこにも異常がみられずに元氣な様子であった。

大学病院にいた医局の先生たちの協力によつて彼を助けることができた。このことは、「医者とは、患者さんを最後まで諦めてはいけない」という私の教訓にもなった。



生還！バンザイ突撃に参戦した軍医中尉（5）

協力 美濃部 幸恵
美濃部 欣平

バナデルの洞窟へ

（玉砕突撃前には海軍野戦病院でもあった）

“六月もなんとか生きのびて七月となる。私の三十六年の人生もあと三日か四日だろう”（ある陸軍参謀）

日本軍最後の司令部を置いた地獄谷にも、艦砲や高地に進攻した米軍陣地から敵弾が雨のように降ってくる戦況となった。

7月2日 地獄谷付近にも砲弾の落

下がいよいよ激しくなってくる。

この日海軍司令部から、

「わが海軍機がバナデル飛行場へ緊急着陸するかも知れないから、261空の全員は飛行場近くの洞窟に移動すべし」

との命令が来たので、深夜井手軍医は、医務隊員と共に負傷者を連れトラック3台に分乗し、ほかの者は徒歩でサイパン最北端の洞窟へと移動して行くのです。

7月3日 『午前3時ごろ、以前より海軍の工作隊が手を加えていた洞窟に到着する。』

洞窟の周囲は熱帯樹林におおわれ入り口は径3メートルほどあった。そこから約5メートル、斜めにハシゴで降りる。内部は広く、奥行きは、7・8メートルはあった。木材で数

段の床が張られてある。』

負傷者を收容し、医務隊、主計隊等はここに駐留し、命令を待つ事になりました。

洞窟の暗闇の中にロウソクと灯油の光が点在し、光の周りに数人ずつが集まっていました。

軍医としての仕事は、一日中負傷者の診察と包帯交換で、とくに傷口にわくウジ虫の除去に追われたとあります。

食糧は、もうにぎり飯などではなく、乾パンとわずかな飲料水がくぼられる洞窟生活だったと書いておられます。

サイパン戦を通して日本兵や避難民を苦しめたのは、極端な水不足でした。

珊瑚礁のサイパン島には、ドンニ



① バナデルの海軍洞窟へ

JACKさんがチャモロ人牧場主さんから洞窟の場所を聞き出しました。



② 偵察からもどるJACKさん。

“スゴイ洞窟がありましたよ”

右下) 道路向かい側には、マツピ山。

崖下にあった海軍戦闘指揮所には（現在のラストコマンドポスト）上田猛虎司令官等がいました。

し、タロホホ、極楽谷などの限られた水源地の他は、真水の河川は皆無であり、島民は雨水をタンクに貯めて使っていました。

『負傷者は次第に衰弱していく。全員が栄養不良で体力が落ち、そのうえ吹き出物や、シラミの発生になやまされる。ビタミンAの不足の結果多くの者に視力の衰えがめだち、夜盲症の症状があらわれた。』

7月5日ごろからは、陸軍部隊や民間人も洞窟に集まってきました。

医務隊は海軍、陸軍そして民間人も区別なく、軍医長の指揮下ひたすら治療にあたります。

戦死者は夜のうちに洞窟の外に搬出し埋葬していたそうですが、戦局が悪化し米軍攻撃が激しくなると、死体を木陰に安置するのが精いっぱい

いとなったと記述しています。

タポーチョ山の争奪戦に勝利した米軍は島の北端に向かって進撃を早めた。

日本兵と避難民は入りみだれて、北へ北へと追つめられてきました。ぼろぼろの衣服をまとい飢えと渇きに苦しみながら、ガラペラ方面やマトイス方向から最北端のバナデルへと集まって来たのです。

バナデルの海軍洞窟について

戦後井手次郎先生は昭和44年8月（1969年）に当時二十五年ぶりに奥様とサイパン島慰霊に行かれたそうです。

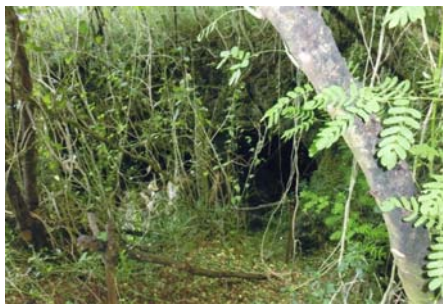
「サイパン陥落後、洞窟は米軍がブルドウザーで入り口をふさぎ、今ではタガンタガンのジャングルの中

にあり、現地の人すら足を踏み入れることの出来ない場所になっていた。」と書いておられます。

井手先生ご夫妻が再訪してからさらに四十五年後に、(第十二回サイパン戦跡めぐり 2014年12月9日) 夫と私はサイパン戦末期に野戦病院にもなった井手先生の海軍バナデル洞窟を探す目的でやってまいりました。

日本を発つ前に希望を伝えましたらヨネコさんや、元米兵の戦跡ガイドもするジャックさんが、現地の伝え聞きルートをたどって場所の見当をつけておいてくださいました。

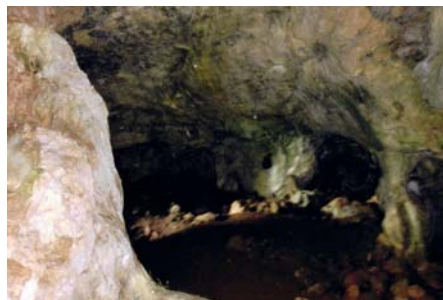
註：書物によりバナデルまたはバナデロ、バナデルの記載があります。本文では井手先生の著書で使われたバナデルに統一しました。



③太い蔓と枝の手すりにつかまりながら、階段状に掘られた坂を下りていきます。



④山林を海側へとけもの道を下りていきました。やがて一同あっと息を呑む。ありました！下方に洞窟が、黒い口をあけて。



⑤歳月の経過が感じられる大きな洞窟です。
“井手先生！わたくし達探して参りましたよ。
先生が御本に書かれた70年前の海軍洞窟の
野戦病院跡に“



⑥この洞窟に海軍の傷病兵の他、陸軍部隊や逃げ
てきた民間人も集まってきました。
井手軍医等医務隊員は一日中患者の手当てに追
われていました。



⑦さらに奥の方に洞窟は続いています。



⑧当時の分厚いガラス瓶の底が残っていました。
木片 「洞窟には、海軍工作隊により木材で数
段の床が張られていた」と井手先生の記述にあ
る。朽ちた木片が土埃の中に残っていました。



井手先生は洞窟には「入り口から5メートルほどハシゴで降りた」と回想しておられる。今回私たちは、何時頃つくられたのかはわかりませんが、蔓や枝を使った手すりとジャングルの急勾配を階段状に整えた坂道を往復することが出来ました。推測ですが戦後、旧海軍関係者が遺骨収集にこられて蔓や枝を使った手すりとジャングルの急勾配を階段状に造られたのではないのでしょうか。(ヨネコさんは現地の人がこのような設備を作ることとは絶対にないと言います。)

バナデルの飛行場は、開戦後に建設が開始されたが、完成をまだ6月11日からのアメリカ軍の爆撃で破壊され、ほとんど使い物にはならず日本軍の飛行機が飛ぶことはなかったのです。

バナデル飛行場の背後には、マツピ山249メートルの岩山が屹立している。

米軍の占領宣言前後の頃には、マツピ山と北端のバナデルに追い詰められた日本軍兵士や一般邦人が、この地域に大勢なだれ込んで来ました。鬱蒼とした熱帯樹林の先は高さ二百メートルの断崖と、荒海が広がるだけ。もう逃げ場はありませんでした。バンザイ岬の投身自決と同じような凄惨な悲劇が繰り広げられた場所でありました。



太古の時代を思わせる巨大な堆積岩にはサメの歯型の空洞が。
下方は海への断崖。

わずかの間居るだけでも恐ろしいような所です。

この洞窟で覚悟の自決をされた軍医、重傷兵、追いつめられた一般邦人の方々の苦しみ、絶望、無念、悲しみと共に私たち一同御霊やすかれとご冥福を祈るばかりの戦跡でした。

—— (261 空最後の海軍野戦病院跡) ——

米軍報告書は語る

I Bでは、アメリカ人にとって理解しがたい日本兵の玉碎や自決の行為を以下のように分析しています。

▼彼らが死ぬまで戦ったのは、降伏を禁じられ、捕虜は恥辱とされていたからである。

▼日本兵はアメリカに捕まったら殺されると思っていた。「鬼畜米英」のプロパガンダによる虐待の恐怖が捕虜になる不名誉と、本人や家族が被る社会的迫害をなにより怖れていた。

▼日本兵捕虜たちは降伏という不名誉のため、絶対に日本に帰ることはできないと主張した。

また、ディスカバリーチャンネルで現在の軍事アナリストは次のように語っています。

日本軍は武士道精神による自決、玉砕を行い、多くのアメリカ兵の命を道ずれにした。太平洋戦争の日本軍は強敵であったと。



通称ラストコマンドポスト（最後の司令部跡）マッピー山の崖下にある岩山の窪みの中に造られている。旧日本海軍の監視哨要塞であり、サイパン戦末期は戦闘司令部が置かれていた。戦時には熱帯樹林に隠れた場所であったろう。

上田猛虎司令官がいた！戦闘司令部
現在はサイパンの観光スポットになっている「ラストコマンドポスト」と名付けられた戦跡になっています。標高249メートルのマッピー山の峻しい崖下の自然窟を利用した海軍監視哨要塞でした。当時は海軍部隊の上層部が集まり、最後の作戦指揮をとっていた所でした。
今日、周辺は整備された広場にな



要塞の入り口は岩山の窪みにあり、身をかがめて入らねばならない。

り旧日本軍の機関砲や戦車などの武器も集められ太平洋戦争（大東亜戦争）の史実を物語っている場所です。さらに日本政府によって建立された中部太平洋戦没者の碑、沖縄移民犠牲者のおきなわの塔、韓国人慰霊碑などがあるメモリアルパークとなっています。

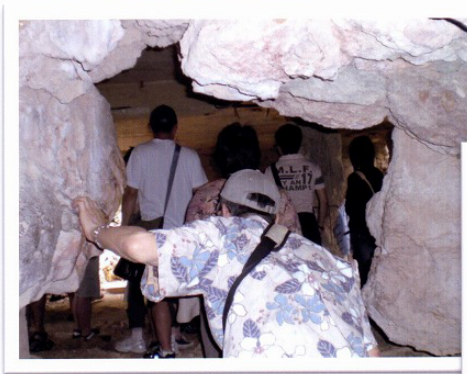


直撃弾が突き抜けた2メートルほどの穴が開いている。

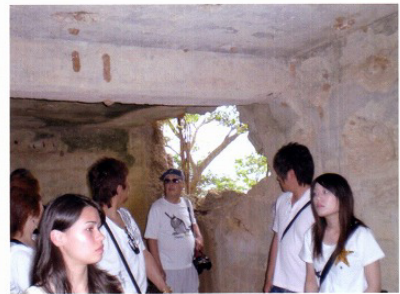
弾痕を残し破壊された機関砲などを目にしながら、石の階段を上って、荒々しい岩山の狭く低い要塞入り口から身かがめ入ります。

どきどきしてきます。こうして内部に入り、かつて日本兵が戦った戦争の現実に出会い少なからず衝撃を受けるでしょう。

内部は鉄筋入りの分厚いコンクリートで堅固に造られています。天井



観光スポットになっているラストコマンドポスト（旧日本海軍監視哨跡）若い人達も、熾烈な戦争の現実！に厳肅な面持ちで真剣に説明を聞いています。



も高く、50人ほど入れる広さかと思えます。

要塞は『外部からはまったく発見されないようにしてあり、艦砲の砲弾にもたえらるる堅固な造り』（井手先生記述）だったそうです。

しかし私たちが目にしたのは、直径2メートルほどの砲弾がつきぬけ分厚い壁に開いた大穴、無数の銃痕、鉄筋が剥きだした天井、火炎放射器で焼かれた内部でした。

当時ここには、どのような人が何人位いたのでしょうか？

今から70年前、二十代の井手次郎海軍軍医はこの要塞に来ています。

1944年7月4日の夜、バナデール洞窟から一キロほどのこの戦闘指

揮所に兵二名をつれ、主計中尉と共に連絡にきました。

『その中には十数名の主として海軍佐官級の立ち姿があわいロウソク的光を中心に集まり作戦会議中であつた。』

上田猛虎司令官から、戦況不利の状況と、ここにおいて日本軍の救援部隊上陸の望みも絶えた。最後の総攻撃を敢行するので、全員総攻撃用意、待機せよとの命令を受けとる。

これを受けて深夜に洞窟にもどり岡本軍医長にその旨を報告したのです。

次回日本兵総攻撃へ つづきます。

参考文献

精強261空 虎部隊 サイパン戦記

井手次郎 潮書房光人社

日本軍と日本兵

米軍報告書は語る

一ノ瀬俊也 講談社現代新書



マツピ山の岩山の下に日本政府により建立された
「中部太平洋戦没者の碑」がある。

医芸俳壇



兵庫 廣 辻 逸 郎

新緑に埋もれて妻の声返る

芝桜広し蒼天雲もなく

自撮り棒娘らよく笑うバラの園

小さき風九尺の藤揺らしてゐる

大藤に透けて温顔六地藏

静岡 岩 本 漂 人

箸^お掛けばツツドリの声滝の音

キジバトの鳴けば三時のわらび餅

浜名湖にアオバトの来て薄暑かな

神木の森に一声サンコウチョウ

鳴き交わすアカシヨウビンと河鹿笛

新潟 中 村 雄 彦

年毎に枚数の減る年賀状

新築の家の屋根にも雪積もる

初場所の横綱まわし取らず勝つ

孫ほどの背丈の老女若菜摘む

暖かに猫はつらつと話する

東京 小 南 丁 字

年の瀬や浅草名物手形撮る

ダブル富士水面の初富士ダイヤモンド

一葉の知られざる館春の的

臘梅の綻びのぞかせ垣根越し

大鵬越え白鵬初場所恩返し

東京 福 神 規 子

讃州に古りしみささぎ夏落葉

をがたまの花咲く頃の御陵かな

河鹿宿朝の竈の火を熾し

草笛や平家の裔として老いて

桐の花遠まなざしは父に似て

東京 福 富 清 子

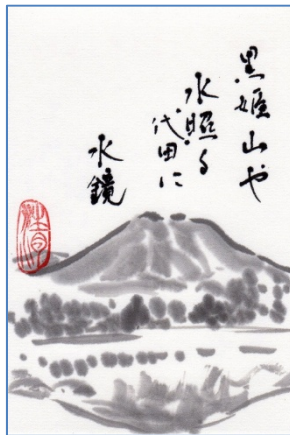
流るる雲と風の交信柿若葉

登校尻跳ね跳ねお早う夏は来ぬ

花は葉に友だち何人できたかな

藤房に背丈競ひし友逝けり

夕影に朱しるき薔薇名はアンネ



医芸柳壇



東京 小南 丁字

ステアートカップ鑑賞息を呑む

日本海次世代資源燃える水

羽生ケガ王者の滑り3連覇

日米のギネスの老齡入れ代わり

四十代イチカズ旭天離れ業

群馬 豊泉 清

箱根山噴火で再び天下の陰

法改正戦死が復活おくやみ欄

四年後も掛け声だけの瓦礫処理

選良は辞書の中だけで生きており

父と子が家具屋で椅子の奪い合い

青森 秋元 光博

カミソリと言われた頃は夢も見た

言い訳のように溶けてく角砂糖

夏まつり何処も彼処も平和な灯

時々前頭葉が欠伸する

親と子の異次元回路すれちがう

青森 秋元 光博

多彩なる昭和を生きたカニぶたい

晩学の小さな夢を諦めず

我慢して良かった答汗がくれ

通リゃんせ子供の声が消えた路地

ここの鳥我が家にほしい子を授け



医芸歌壇



春の庭

茨城 羽生 藤伍

わが庭の小径を飾る雪柳そよ風に揺れあふれる如し
春なれや若葉の緑色^{つばき}冴えて躑躅^{つばき}は紅や白も咲きたり
紅き芽の緑となりぬ石榴^{ざくろ}の樹また赤き実の裂ける日を待つ
散歩路に見し荒畑にわが犬を放てば狂喜乱舞の如し
散歩路に馬頭観音像ありて礼をすべきか時々迷う

眼球注射

東京 横田 英夫

地下鉄の吊広告の女優像左眼にて見れば恐ろしき顔
黙々と予約時間に歩み行く進まぬ心励ましながら
処置室の大型の椅子に坐り居りさながら吾は狙の鯉
目眩みて眼球注射終りたり渦巻く液をまなうらに見る
意外にも視力改善せりと言う左眼の歪み直らぬままに

曼珠沙華 1

青森 秋元 光博

たましいの一本立ちの木賊には葉なし花なしなきぞすがしき
美吉野も那智九十九里浜も不二ヶ嶺もめでたきかなや君に詠まれて
逢いたけれ心細けれ悲しけれ君待ちたまふ十方億土かな
雪作るほとけもろもろ釈迦仁王蔵王の山の樹氷佛かな
天近き十和田の湖は寂寞と今も太古の空を映せり

曼珠沙華 2

東京 秋元 光博

病床の子規の獅子吼にこの国の魂哀へし歌よみがえり
我の行く黄泉のやみじき照らすもの星にほたるにほほつき提灯
曼珠沙華十方無碍の花びらが宇宙をつかみ宇宙を放つ
天涯の孤独のごとししんと降りつむ夜半の雪を聴くとき
空の月掌に水張れば掌に來たるこぼせば散りて空に帰れり

缶

東京 小松 安彦

午後七時過ぎれば蟬の鳴き声は途切れとぎれになりて鳴き止む
ポリバケツの中で跳ねてるこほろぎを七月尽の庭へと放つ
立秋の深夜にこほろぎ鳴いてゐてアルデバランとカペラが昇る
白山の山頂に立つなかなかに北アルプスは見せぬ全容
カルピスとレモンティーとの缶二つ八月尽に並べ飲みをり

中村宏個展寸描

東京

林

宏 匡

暑き日に中村宏の絵に会ひて汗退きにつつ戦を怨む
目ひとつに画く思想は何処より湧き出でしかも宏と茂
キャンバスに画かれしまなこに見つめられ恐ろしくもあるかわれ立ちつくす
空を飛ぶ列車地を這ふ飛行機を画きし宏のいさぎよき異質
曇天に拡がる人造物全て中村宏の絵に塗られけり

中村宏個展寸描

東京

林

宏 匡

一面に血の湧き出づる「血井」てふ画は赤裸々に赤の
犯罪の湧き出づるその源を揶揄せることき灰と黒の画
あでやかな色彩全て封じ込む黒き画念の中村宏
一眼の画風変へざる一徹さ客員教授の中村宏
老いてなほ中村宏のその画風若かりしときと変らざるめやも

表紙の言葉

練馬区 荻野 公嗣

『静物』 P10 油彩

インターネットで Daniel Keys という若手のアメリカの画家を見つけた。小説家の Daniel Keyes ではない。アラプリマで描く彼の作品があまりに素晴らしいので、まねをしたというのが本音である。彼のブログによれば、暗部には筆のひっかいた跡が下地を通して見える scratchy なタッチが好きだという。たしかに油絵具の深みとともに透明感と動きが出せる。溶き油にはダンマルワニスを使うそうだが、私は普通のペインティングオイルを使った。ペインティングオイルも壺にいれておくと粘っこくなる。キャンバスは、パサパサしたものよりスムーズな表面のほうが描きやすい。というわけで scratchy な感じがおわかりいただければ幸いです。

(第 62 回 医家美術展 展覧作品)

《詩》

青森 秋元光博

輪廻転生

幻聴のような死の彼方の声
聞くこともできない空の耳
あたな方には死はなく
死という言葉もなく

死を解せない永久の流れ者

桜花の咲きすさぶるころには姿も見せず
美しく散るすべも知らない不幸な耳
何を聞いてにやけているのか

哀しい事実だけが淀んでいる濁世に
先をさえぎっている雲の輩よ
確と聞いてその耳を疑うな

すでにこの地上は
貧富の落差で傾き
鳥たちも啼き声を放ちながら
空を迷っている

太宰治の地へ

松島（マツシマ）村から五所川原サ
町買（マジゲ）に來た戻りの馬轡さ
父ちやど乗へでもらた

チリンチャリンて馬（マ）コ馳（ハ）ければ
吹（フギ）だまりの流れサドシンと落（オ）じで
轡サ頭（アダマ）コぶつつける

藪へ四ツの我（ワ）サ

泣ぐな 泣がねで母ちや待てるべ
父ちやの大（オ）き手でナツギさ涎（ヨダレ）コつけでける
病気で実家（イ）さ戻てら母ちやさ会ひに行ぐヨ
——オラばだまって抱っこしてくれだ

そいがらニコって笑てけだ

母ちや水（ミツ）コ飲見てエなアって
我 積てら雪コ サラツととろけで

下の雪コ（フト）つかみ前垂（メダリ）さ
かくしてーの！

「メイちゃ メイなア」て

雪コ食（カ）へで良（イ）がったなアて

雪

降る雪の数をかぞえる

自己主張しながら近くに舞い降りる雪

遠くで誰にも気づかれないように

ひっそり着地する雪

神様なら

その無数の雪の

そのひとつを見届けることができるのだろうか

それぞれが違ったかたちをしている

想い出をかぞえるように雪をかぞえてみる

その無数の記憶の断片も

遠くに近くに

それぞれのかたちで舞っている

時には吹雪となる哀しみ

牡丹雪となる恋

粉雪となる家族の絆

記憶の中では絶え間なく降り続くそれらの雪は

時にはぬくもりがあったり

時には心の芯まで凍りつかせる

子供だった頃

スキーやソリ

雪合戦や雪だるま

かまくら作り

無我夢中で雪の中を駆けまわっていた

父がいて

母がいて

姉がいて

弟がいて

想い出の雪の数は尽きることはない

その無数のかたちを脳裏に刻みつけながら

これからも生き続ける

降る雪の数をかぞえる

ゆきのかたちは現在進行形

フレンツ・フリツチャイの苦悩

音楽評論

(ブラームス交響曲第1番ハ短調)

みやま みちひと
海山道人

偏歴の始まり

○大学のU先生が、「カール・ベームの指揮するブラームスの交響曲第1番が好きだ」と言われた時から、僕のブラームスの交響曲の偏歴の旅が始まった。1959年録音のベームの1番が素晴らしいことは重々承知していたが、その言葉を聞いた瞬間、ブルーノ・ワルター指揮コロンビア交響楽団の4番におぼれ、ほとんど毎日3回も4回も聴いていた17歳のときの僕に、瞬時に戻ってしまったのだ。

枯淡の境地の寂寥感あふれるこの演奏は、当時の僕に人間としてのあり方を示したものとして理想だった。50年近くの年月が過ぎた今になって聴きなおしてみると、今の僕は枯淡の境地を好まず、戦闘的で、死して後やま

ん、というような演奏を欲するようになっていたのだった。

これは軽い驚きだった。年月が人に及ぼす影響は大きい。

それに気づいた僕は、これまで聴いてきた録音を全て聴きなおそうと思い、4つの交響曲のCDを引つ張り出してきて何度も聴いた。それだけでは済まず、インターネットで注目したCDを購入し、上京した時に、御茶ノ水の『ディスク・ユニオン』に立ち寄っては山のようにCDを買い込んだ。そしてそれを1枚1枚聴いていったのであるが、聴いている途中でも好みが変わってしまうことがあり、自分の心の変化を楽しんでいるうちに、このエッセイを書くという気になった。

フレンツ・フリツチャイの

ブラームス交響曲第1番

1956年2月8日、ジュネーブのヴィクトリア・ホールでの演奏会のプログラムは、バルトークの『デイヴエルティメント』、リストの『ピアノ協奏曲第2番』（ピアノはアルド・チッコーリニ）、そしてブラームスの『交



響曲第1番」であった。

オーケストラはスイス・ロマンダ管弦楽団、指揮は、この楽団にとって初登場となるフェレンツ・フリッツチャ

イである。

スイス・ロマンダ管弦楽団は、エルネスト・アンセルメによって1918年に創設されたオーケストラで、当時もアンセルメの統率下にあり、素晴らしい録音によって世界中に知られていた。客演も多く、カール・シューリヒト、ウィルヘルム・フルトヴェングラー、ハンス・クナッパースツブッシュなどの演奏会が人気を呼んでいた。バルトーク、リストと進行的演奏会は、最後のブラームスの交響曲第1番を残すのみとなった。曲が始まった。

第1楽章冒頭は緊張感にあふれ、気迫をみなぎらせて前へ前へと進んでいく。ものすごい推進力だ。高い理想と妥協しない意思。若々しく、生き生きとしているのみならず、颯爽として希望に満ちた演奏である。

この第1楽章を聴いただけで、彼がいかに素晴らしい指揮者であったかがわかる。

このとき、フリッツチャイ42歳。壮年期に差しかかったばかりで、前途は洋々としていた。

ブルーノ・ワルターは、この頃の彼について次のように語っている。

「フェレンツ・フリッツチャイは、謙虚の美德を備えた数

少ない若い指揮者のひとりです」。

彼の演奏は、どれも生命力に満ちているが、もう一つ重要な特徴がある。それは、どの演奏からも真心と誠実さが感じられるということである。そして、常に「希望」がある。

フリッチャイは1954年にイスラエルに客演し、ヴェルディの「レクイエム」を演奏した。この演奏会は、結果的には大成功をおさめるのであるが、彼は、当時全く練習の出来ていなかった合唱団員に向かって次のように言ったという。

「あなた方は、私が意図するように歌わなければならない。私だつていつも人の言いつけに従順であろうと思つていなのです。なんなら、家内にたずねてみてください」

そこにいた人は、きつと噴き出したであろう。

これは受けを狙つての発言ではない。けれども、この言葉の中には深い意味がある。

フリッチャイには、どのような曲であつても、こうであるべきであるという形がはつきり見えていたはずであり、そのためには、オーケストラや合唱団のメンバーはこのように演奏しなければならない、という信念があつ

たはずである。

上記の言葉は、それを実現するにあたつて、自分の中に明確に見えている形を合唱団のメンバーに伝えようとしたに過ぎないのであつて、強圧的に自分に従わせようと言う意図は、全くなかつたはずである。

キビキビとした演奏は、トスカニーニにやや似るが、その本質は全く異なっているということが、この言葉から理解できよう。もちろんその演奏からも・・・。

ブラームスに返ろう。

第2楽章は美しく、叙情的で、途中から入ってくるバイオリン独奏は緊張感にあふれている。

多分この演奏はコンサートマスターと思われる。名前は分からない。1946年までスイス・ロマンダ管弦楽団のコンサートマスターをつとめたミシェル・シュヴァルベは、その後フリーに転じたが、1957年にカラヤンに請われてベルリンフィルのコンサートマスターに就任するまで、スイス・ロマンダとは密接な関係を保っていた。しかし、バイオリニストでもあるK先生に聞いてみたところ、どうもこのソロは彼ではなさそうだということだった。

第3楽章も誠実に、丁寧に演奏され、美しい。

第4楽章も、奇をてらったところはなく、正面を向いて堂々と演奏していく。有名な第4楽章の第1主題の「暗黒から光明へ」というテーゼも、ことさらに強調するのではない。良く聴くと、英雄的な表現ではなく、「やさしさ」に満ちた歌であるのが分かる。この楽章全体を見れば、やはり潑刺として自由な気風にあふれる気品の高い演奏であり、フィナーレは高揚感に満ち、緩急の幅が大きくなり、次第に遅くなっていくテンポと相俟って、極めて劇的である。

最後の一音が鳴り終わった途端、間髪をいれず拍手が沸き起こり、賞賛の歓声が贈られている。当時のヨーロッパの演奏会では、通常、曲が終わってから数秒たってから拍手が始まるのが一般的だったから、このジュネーブの聴衆の熱狂振りは異常といえるだろう。それだけ、彼の演奏が素晴らしかったと言うことの証左である。

再びフリッツチャイのブラームス交響曲第1番

この演奏のほぼ2年後（1958年）の2月2日と3日に、フリッツチャイは、ハンブルグのムジークハレで、北ドイツ放送交響楽団の客演指揮者として、ブラームス

の「交響曲第1番」を演奏している。

曲目は、2年前と同じようにバルトークの「デイヴェルティメント」で始まり、今回はリストではなくコダイの「ガランタ舞曲」と続き、そして最後がブラームスの「交響曲第1番」であった。

幸運にもこのブラームスの「交響曲第1番」は録音されていた。

そのCDを入手し、期待に胸を膨らませ、音響装置をオンにして音楽をスタートさせた僕は、そのあまりにも苦悩に満ちた表現に驚愕した。

冒頭のティンパニーの連打からして苦悩に満ちている。2年前の、明るく希望にあふれ、潑刺と演奏していたフリッツチャイは一体どこに行ってしまったのであろう。

ブラームスは、この交響曲の第1楽章の冒頭をどのよう開始すべきかを、悩みに悩んだかもしれない。結果、ティンパニーの連打と低弦を中心とした重厚な表現を選んだ。この部分は、ブラームスの苦悩の表れなのだろうか。

フリッツチャイは、そんなことを考えて、この部分をこのように苦悩に満ちた表現にしたのであろうか。そうではないような気がする。

もしそうならば、2年前の演奏にすでに同じ表現がとられていたはずである。しかし、その形跡は全く見られない。

この苦悩は、全曲を通して一貫している。顕著に現れているのは、第1楽章半ばの部分である。苦悩はその極みに達し、もはや崩壊寸前であるかのようなのである。

満身創痍になりながら、なおかつ全力を振りしぼって血路を開き、前へ前へと突き進む古武士のようなフリッチャイ。

希望と絶望の狭間にあつて苦悩するフリッチャイ。

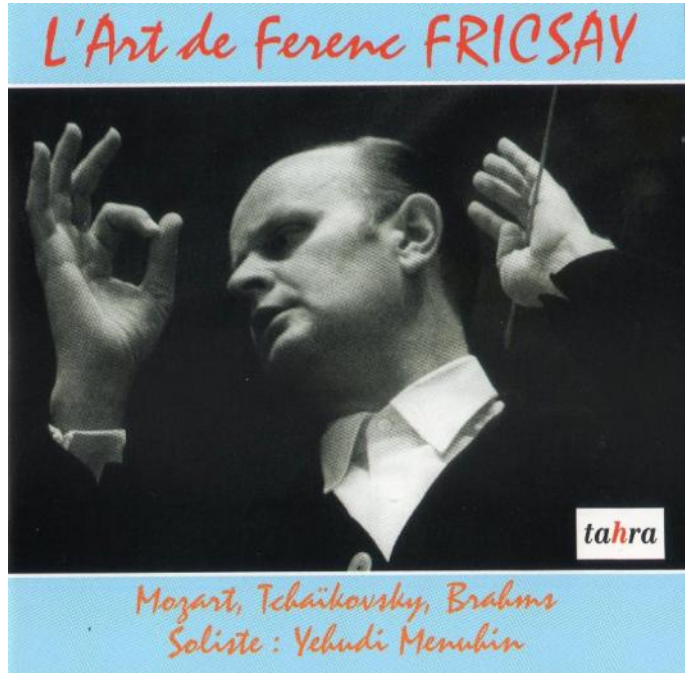
僕は深く感動し、しかし、そのあまりの変貌ぶりに茫然としてこの録音を聴いていた。一つ一つの音の深さが、2年前の演奏とはまるで違う。この音は常識を超えている。全楽章を通じてこのように鳴っているのだ。

曲は進む。

苦悩で始まった第1楽章は、その苦悩を収束するように、テンポを落とし、一つ一つ丁寧にしまいこむようにして終わる。

沈痛な表情で開始される第2楽章。この楽章は、確かに苦悩の表情は見られるものの、深い音、ゆったりとしたテンポ、美しいヴァイオリンソロなど、心休まるひと

時である。これが、束の間のやすらぎなのかどうか……、しかし、この時間は、何物にも代えがたいと思う。第3楽章は思索的に始まり、思索し続け、思索しながら終わる。この思索は、次の楽章につながって行く。



第4楽章は、ふたたび苦悩に満ちた深い音で始まる。

第1主題は、誠実に、本当に誠実に演奏されていると思う。カラヤンのような華麗さもなく、ベームのように謹厳でもなく、ミュンシュのようにきらびやかでもなく、メンゲルベルクのように太向こうを狙うでもなく、ただ誠実に音楽を進めていくフリッツチャイ。ここでの彼は禁欲的であるかのようなのである。そこに、彼の万感の思いを聞き取るのは僕一人だけであろうか。

この楽章の最後の方で、もう一度苦悩が最高潮に達して爆発してしまうところがある。そのあとのクララのテーマが、散ってしまった音を拾い集めるようにして再び形が復活し、次いでクライマックスに入っていく。

曲が終わりに近づくにつれて緩急の幅は大きくなり、テンポはだんだん遅くなる。しかしそれは2年前の演奏の比ではない。

韋駄天が天空を翔けていくようなティンパニーの強奏のあと、演奏は息つくひまもなく終盤へと突入していく。そして、最後の一音は、通常の3倍ほどの空白の時間の後、響き渡る。

彼は、この演奏が終わらなければ良いと願っていたのではないか。このまま終わらなければ、至福の時間は永

遠に続くのに……。そう思っていたのではないか。

曲が終わってからの拍手は録音されていない。しかし、この演奏の後、すぐに拍手しようと思う人はいなかったであろう。それほどに、この演奏は重く深いものであった。

それにしても、北ドイツ放響のメンバーは、自分たちが世紀の名演奏をなしとげたのだということに、果たして気がついていたのだろうか。



フリッツチャイの苦悩はどこから来たのか

この第1番が苦悩に満ちているのはなぜだろう。

僕は、押しつぶされそうな苦悩の中にありながら、なおかつ彼が希望を棄てていないことに興味を持った。この演奏は、どんなに苦悩に満ちていても希望が感じられる。聴く人に深い感銘を与えるのは、それゆえではないか。

2年前の演奏は希望に満ち満ちたものであった。

その演奏と、2年後のこの苦悩に満ちた演奏との間に、フリッツチャイに何が起こったのだろうか。

この2つの演奏を聴き比べてみると、1956年の演奏がトスカニーニ的であるのに対し、1958年の演奏は限りなくフルトヴェングラーに近い、と言えるかもしれない。ただ、前者の演奏は、トスカニーニのように楽員と聴衆に自分の音楽を強制して出来たものではないし、後者の演奏も、人間的な歓びを表したというより、苦悩の中に希望を見出そうと努力する姿が感動を与えている部分が少なからずあると思う。

多くの解説書は、フリッツチャイの演奏が晩年になって大きく変わったと書いている。それは大病に罹患したた

めであるとも書いている。その病気とは「白血病」であったといわれる。確かに、1959年から1961年の短い間の貴重な録音には、それまでにない重厚さと深い思索と大きなスケールが感じられる

彼の病気は果たして白血病であったのだろうか。

フリッツチャイの病気

フリッツチャイの病跡について、日本語の文献では、白血病であったとも、何回も手術を受けたとも書いてあるが、真相に触れたものはない。

それで、ドイツ語のウィキペディアを調べてみた。

2箇所に記述があった。翻訳して記載する。

※

※

※

最初の病気の発現と一時的な回復

1958年の11月末、フリッツチャイは胃癌と診断され、同じ月のうちにチューリッヒで手術を受け、2回目の手術が翌年の1月に行われた。1959年9月まで、何か月にもわたる休養期間が続いた。

病気の再発と死

ロンドンにおけるいくつもの客演の後、フリッツチャイは1961年12月に再び重い病氣にかかり、引き続いて手術を受けた。1961年12月7日、フリッツチャイは生涯最後のコンサートを行った。彼は全ての約束を取りやめた。1962年の夏、この病氣の局面はまるで良くなかったかのようで、乗り越えられたかのように見えた。

この年に、かれは「モーツアルトとバルトークについて」と題した本を著述した。その中で、彼はクラシック音楽一般についての基本的な見解を述べ、タイトルの中で特別な名を付した作曲家の音楽について詳述している。フリッツチャイは、1963年2月に、胆嚢穿孔の結果バーゼルで48歳の若さで亡くなった。そして、エマルテインゲンの墓地に埋葬された。

* * *

ドイツ語のウィキペディアの記載は以上である。

これで見ると、胃癌と診断されて手術を受けたのは1958年11月で、2カ月もたたないうちに2度目の手術を受けている。

僕がCDで聴いた2回目のブラームスの演奏は、その年の2月の演奏会のものであるから、手術の10ヶ月前である。すると、彼はこの2年間の間に病氣ではない何か

があつて、これほど大きく変貌したのだろうか。

腑に落ちない僕は、さらに細かく年表を見た。

あつた。

1957年のいつかは分らないが、この年にミュンヘンで「重篤な病氣」にかかり、ヒンデミットの交響曲『世界の調和』の初演を作曲者に返上した、とある。

この病氣が何であるかは分らない。翌年の手術につながるものかも知れない。

だいたい、白血病という病名はどこから出てきたのであろう。不思議である。

更に、ゼンタ・マウリナ（1897～1978・ラトヴィア出身の作家は、「フリッツチャイ追悼文集」の中で、次のように書いている。

「最初の胃の手術を彼は十七歳の時に受けていましたが、二度目のものは一九五八年の十一月に、三度目のものは一九五九年に行われ六時間を越えるものとなりました。一九六二年の一月からは腫瘍の手術を伴う大いなる苦難の時期が始まります。十回に及ぶ手術をもつてしても、彼を死から救い出すことはできませんでした」。

この話を、U先生とO先生にしたところ、二人とも即座に、「それは悪性リンパ腫ではないだろうか」と言った。

一般的に、白血病と悪性リンパ腫は間違われやすい。胃原発の悪性リンパ腫の場合、胃癌と混同されやすい。

いろいろな話を総合すると、フリッツチャイは悪性リンパ腫に罹患し、この病氣と格闘しながら、人類の宝とも言える一群の録音を残したのではないか。

1957年の、年表にはほんの小さく書かれているに過ぎない「重篤な病氣」こそ、悪性リンパ腫の始まりだったのではないか。

このときに、死の予感に襲われた彼は、自分の人生について深く考えたのではないだろうか。

エーリッヒ・ケストナー（1899～1974・『飛ぶ教室』の作者）は、フリッツチャイの死後、次のように書いている。

「フリッツチャイはキュビリエ劇場で指揮したとき、既に外科医からの所見を聞いていたのです」。

ミュンヘンのキュビリエ劇場が再建されたときの最初のコンサート（フィガロの結婚）は、1958年6月14日である。従って、彼は最初の手術の何ヶ月も前に自分の病氣が何であるかを知っていたことになる。

おそらく、1957年の「重篤な疾患」の時に、自分の余命が限られたものであることを聞いていたのである

う。

☆

☆

☆

フリッツチャイは、1960年12月5日のヘルツフェルトへの手紙に、こう記している。

「病氣を得たものの、またそこから回復することができたことについて、神と運命に感謝しています。このことを生涯忘れまいと思います。なぜならば、このような試練を乗り越えたことは、人生におけるたんなる一面ではなく、神による勲章のようなものであると信じるからです。私は病床で心の底から願いました。できるものならもう一度生きたい、健康になりたい、と」。

その後

フェレンツ・フリッツチャイは、1962年2月20日に48歳で亡くなった。そのあまりにも若すぎる死は皆に衝撃を与え、フィツシャー・ディスカウは、「フェレンツ・フリッツチャイ協会」を設立して、彼の業績を讃え、後世に伝えようとした。名誉会長にはカール・ベームが就任した。

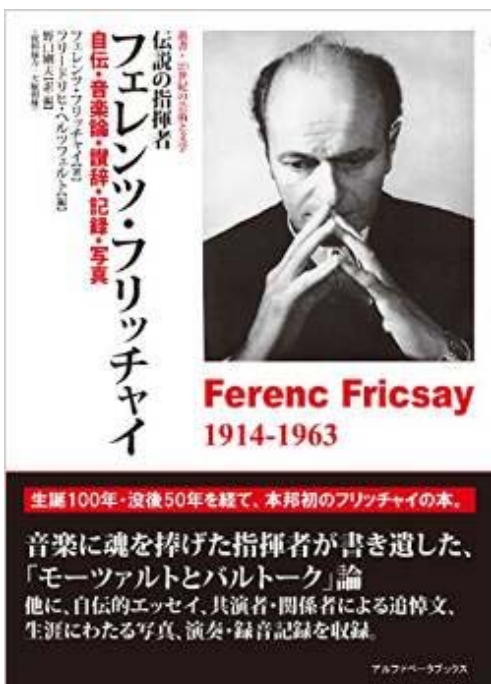
彼の死の翌月（3月）、ベルリン放送交響樂團による追

悼コンサートでは、同じ1914年生まれのアラエル・クーベリックが指揮台に立った。

付記

この小さなエッセイを書くに際し、アルファベータブックス発行の『伝説の指揮者・フェレンツ・フリツチャイ』を大変参考にさせていただいた。

この本は、1961年10月29日のユーディ・メニュー



ーインの序文と1962年1月15日のエリック・ウェルバのあとがきに挟まれた『モーツァルトとバルトーク』と題されたフリツチャイ自身の小論と、親しかった友人フリードリッヒ・ヘルツフェルトが編集した追悼文集を、野口剛夫氏が翻訳し、さらに資料を付け加えて編纂・上梓されたものである。

『モーツァルトとバルトーク』は、この2人の作曲家へのフリツチャイの想いが強く出た名著であり、このような切り口があるとは、フリツチャイ以外の誰にも思いつかなかったであろう。

追悼文集は、書いている人の誰もが、フリツチャイへの限らない愛情を抱いているのがよくわかり、時に涙を誘われる。

第三部の資料編は大脇利雄氏の録音関係のデータが、ほぼ全て収録されており、フリツチャイの演奏活動がこれだけでわかるようになっていく。

この編の最後にあるヘルツフェルトによる年譜は、フリツチャイの病跡をたどる上で大変参考になった。この年表と、追悼文集に書かれている記載を勘案すると、フリツチャイの病気は、白血球でもなく、胃癌でもなく、U先生とO先生の指摘されたとおり、悪性リンパ腫であ

ったと思われる。

謝辞

この文章を書くきっかけを与えてくださったのは、大阪大学医学部小児外科学教室の上原秀一郎先生（文中ではU先生）と、金沢大学附属病院漢方医学科の小川恵子先生（文中ではO先生）である。フリッツチャイの病気がなんであつたかも、このお二人から示唆をいただいた。

また、1956年のブラームスの1番の第2楽章のバイオリン・ソロがミシェル・シュヴァルベかどうか判断に困っていた小生に示唆を与えてくださったのは、自身もバイオリンリストである、刈谷市の広瀬クリニック院長・木許泉先生（文中ではK先生）である。1959年録音のカール・ベーム指揮、ベルリンフィルの演奏におけるミシェル・シュヴァルベのソロと比較していただいた。

記して3人の先生方に感謝申し上げます。

秋季号・冬季号 原稿募集のお知らせ

次号（秋季号）締め切り

平成27年8月20日（木）

次々号（冬季号）締め切り

平成27年11月19日（木）

毎号、会員のみなさまのご協力、誠にありがとうございます。

二季号分の原稿を募集させていただき、掲載季号の指定がございましたら、その旨も原稿送付時にお知らせください。何も記載がなければ原稿到着時点での一番早い季号での掲載となります。

別送にて文芸特集号の募集もさせていただきますので、ぜひご投稿をよろしくお願いいたします。投稿を事前にご希望される方は事務局までFAX又はメールでご一報ください。

引き続き、会員の皆様のご支援、ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

※一部500円にて機関誌の追加購読も承っています。ご希望の方は事務局までお知らせください。

アンコール掲載

『メキシコ・オリンピック』

旅行記念②

日本医家芸術クラブ 編



一九六八(昭和43)年十月十二日、第十九回メキシコオリンピックが開幕した。東京オリンピックが一九六四(昭和39)年十月に第十八回として開催したので、東京の次の夏のオ

リンピックだ。

当時の日本医家芸術クラブには『旅行部』が活動していたらしく、その旅行部がメキシコへオリンピックを見に行つたときの旅行記が発行されている。25家庭33名の方がこのオリンピック旅行に参加されている。2名の添乗員が付き添い13泊15日で、サンフランシスコ、サンアントニオ、メキシコシティ、クエルナバカ、アカプルコ、ロスアンゼルス、ホノルルと7都市を旅している。旅行された方のうち、11名の方がこの旅行記にご投稿されているので、その旅行記を順次ご紹介していきたい。尚、本文は原文のまま、掲載写真は印刷されたものをスキャンしたものなので、画質の悪さはご容赦願いたい。



【旅行日程表】

一九六八(昭和43)年10月

10日 東京発

サンフランシスコ着

東京国際空港より大型ジェット機にて出発、一路サンフランシスコへ

到着後、ホテルにて休息

午後…サンフランシスコ見学、マーケット通り、官庁街、ツインピークス、金門公園、金門橋、漁夫の波止場、チャイナタウン

11日 サンフランシスコ発

サンアントニオ着

サンアントニオ発

メキシコシティ着

サンフランシスコよりメキシコシティへ、途中サンアントニオ市見学

12日 メキシコシティ

第19回メキシコオリンピック
開会式に出席(午後一時〜五時)

13日 メキシコシティ

午前…メキシコ市見学、チャプルテペック公園、ゾカロ広場、中央政府、大寺院、国立人類学博物館等

午後…オリンピック陸上競技見学

14日 メキシコシティ

午前…ティティワカンの太陽の神殿、ピラミッド見学

午後…オリンピック重量あげ見学

15日 メキシコシティ

午前…オリンピックバレーボール見学

午後…オリンピック陸上競技見学

**16日 メキシコシティ発
クエルナバカ着**

メキシコシティより、クエルナバカ經由にてアカプルコへの3

日間のバス旅行

17日 クエルナバカ

クエルナバカ見学、夜はメキシコ政府主催のオリンピックパーク

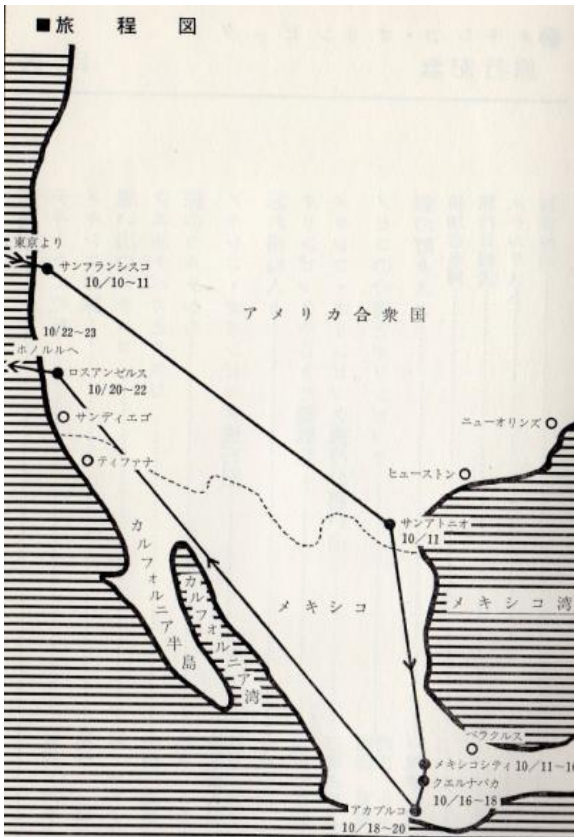
ティに出席

**18日 クエルナバカ発
アカプルコ着**

クエルナバカよりアカプルコへ

19日 アカプルコ

ボートにてアカプルコ湾巡航、



夜はラ・ケブラダの崖上からの
ダイビングショウ見学

20日 アカプルコ発

ロスアンゼルス着

オリンピックヨットレースを見
学、午後の便にてロスアンゼ
ルスへ向かう

21日 ロスアンゼルス

ロスアンゼルス見学、ハリウッ
ド、ビーバーリーヒルファーマーズ、
マーケット、チャイニーズ劇場、
オルベラ街等

22日 ロスアンゼルス発

ホノルル着

ホノルル着後、オアフ島見学、
ワイキキビーチ、ダイヤモンド
ヘッド、ハワイ大学、パンチボ
ールの丘、真珠湾、ヌアヌパ
リ等

23日 ホノルル発

パンアメリカン大型ジェット機

にて一路東京へ

24日 東京着

東京国際空港着後解散

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

オリンピックやじきた観戦記

岡野 岳郎

何でも見てやろうという野次馬根
性は、病こうものに達し、遂に日本
を脱出して裏側に当るメキシコまで
足をのばすことになった。

編集委員の尾松氏と私は医家芸術
クラブの会員として十月十日、未だ
見ぬ異国への不安と期待に胸をおど
らせ多数の見送りを受けて、午後三
時、パンアメリカンの大型ジェット機
のタラップを上った。

一行のメンバーは北は北海道から

西は大阪までの有名無名の先生方と、
家族、並びに添乗員を合せて三十八名
の応援団を組織、平均年令は五五才
だが、二〇代の若者のように元氣。
それに比べれば我々弥次喜多コンビ
は一番年が若く子供みたいなのので
ある。又全科がそろっているので万
一病気になるっても心強い。精神科の
先生が一番多いので、我我頭の弱い
者にとつては有難いことだ。

当日は曇空で少し蒸し暑かったが、
一気に上昇して雲海を突きるとそこ
は、太陽が燦々と輝くブルースカイ、
薄暗かった機内は、パツと明るくなっ
た。機内は静かで快適、椅子の坐り
心地に慣れた頃には、未だ五時だと
いうのに外は暗くなつて来た。夕飯
に当る機内食に舌つつみを打ち、う
とうとするうちに空がしらみかけ、
太陽が薄日をのぞかせる。時計が午
後十一時をさした頃、何時もならそ



オリンピック競技場にて
岡野岳郎（左）と尾松謙のやじきたコンビ

ろそろ寝る時間にもう夜明けで、変な具合だ。始めてみるアメリカ大陸の輪かくが朝焼けの中に、くつきりと見えだしたのが印象的であった。午前零時（アメリカ時間の午前八時）はじめてアメリカ大陸のシスコ空港に第一歩を印した。しかし時差の関係で今日も十月十日である。

シエラトンパレスホテルと言う十階建てのクラシックなホテルで旅装

を解き、半日間、貸切バスで市内観光、金門橋はいにくガスに包まれていたが、雄大である。又ヒッピー族が各所で見られ、さすが発生の地だと感心する。夜はチャイナタウンの中華料理店で宴会、今日は中国の双十節に当たるとかで賑やか。夜霧にぬれたシスコの町も又旅情豊かなり。日本の五月位の気候だろうか。異国のホテルでの一夜は疲れたせいもあってぐっすり夢路をむさぼった。もっと詳しくエピソードをのせたかったのですが、今回はメキシコにしばらく割愛します。残念。

十月十一日（晴）

シスコの空港を午前十一時頃我々を乗せたアメリカン航空は、銀翼を光らせて、一路テキサスのサンアントニオ空港まで一飛び。ここで旅券に出国のスタンプをもらい、一

時間休憩、四時にメキシカン航空に乗り換え、アメリカ大陸に別れを告げた。七二七型のジェット機だが少しガタがきいている様な感じ。しかしスチュワーデスのセニョリータが日本人そっくりの可愛子ちゃん、尾松のユウちゃん持参の舞妓のハンカチのプレゼントで俄然サービスが良くなり、未だ見ぬメキシコに夢は大きくふくらみ、皆元氣いっぱい笑声の絶え間がない。

客のほとんどがオリンピックの観光客らしい。途中給油と税関の為グアダハラ（メキシコ第二の都市）に着陸、女の税関吏が愛想よく「ウエルカム」と申し訳に荷物をチェックしただけ。いよいよ三十分でメキシコ空港だ。予定より二時間位遅れて午後八時頃メキシコ市の灯が見えはじめた。その時機内の電気が急に消えて、アナウンスで夜景のすばら

しさを説明しだした。澄んだ大気の中で真珠をちりばめた様な夜景は百万ドル以上、筆舌には言いつくされない様な美しさで、広々としたシェイを埋め尽し、きらめく星座そのものである。道が広く真直で地盤の関係が高層建築が少く、螢光灯やネオンの少いこの町は明りが統一されている為かも知れない。何はともあれ見とれているうちに八時過ぎ無事空港に着き、可愛子ちゃんがSAY ONARAと振る手に別れを告げ、迎えのバスに分乗し、ホテルに向った。

そのホテルの名はメキシコ流に読めば(ホテル ジュネーブ)ホテルヘネベー。時間が遅いので近所のレストランへ食事に行く。ハポンの団体が来たので食堂側は大喜び、早速メキシコ料理に舌づつみを打つが、アメリカ並みに万事大味、ウエイト

レスのセニョリタと並んで写真をパチリ。五円玉の効果が現れる。穴あき銭は大変めずらしいらしい。ハポネスディネロ(日本のお金)(日本のお金)と大喜び。さらつとして暑くもなく寒くもなく気持ちいい。町は前夜祭でどことなく浮々した感じ。明日に控えてバスルームで洗濯なれないせいかあまりきれいにならない。今までやったこともないことをやるのだから我ながらにやにや笑えてくる。かくてメキシコの初夜はしんしんとふけてゆく。

開 会 式

十月十二日(曇後晴)

御機嫌うるわしくお目ざめ。食堂で朝食、皆あらたまった顔でメキシコ並に朝からモリモリ食べる。セニョリタの愛想がいいのですくわれる。果物がおいしい。ポリウムがあ

るのに圧倒される。メロン、マンゴ、パイア、グレープジュース等どれをたべてもおいしい果物だけでお腹がいっぱい。

十時頃、日の丸の小旗を支給され、十一時から開催されるオリンピックスタジアムに出発。

ホテルからレフォルマ通りの独立記念塔近くのターミナルから出る専用バス乗り場まで五分程歩くが、皆の目が好意にあふれて「ハポン、ハポン」と祝福してくれるのがうれしい。

専用バスは国際色豊か、市内を二十分程走って会場近くまで来たが、車の洪水で進めず降りてメーン・スタジアムまで車の間を縫って歩く。競技場正面入口の上はオリンピックを表現する力強い壁画で蔽われている。指定席に着いた時は、開会式の始まる十分前であった。

前から二列目で場所としては特等席。メキシコが自慢するだけのことはあつて、サラダ皿に似て平たく大きく開いた「オリンピックスタジアム」は万国旗にふちどられて上縁し、ゆるい波形を描いているのはお国柄の帽子ソンブレロをかたちどつたものだそう。今ソンブレロの中に、世界がすっぽり納まつた。昼近くまで雲が多かつた空模様も次第に晴れ上り、ギリシャを先頭に、選手団の人場行進がはじまつたところから、南国特有のきらめく太陽がスタジアムいっぱいにふりそそいだ。

先生方はテレビで入場式の模様をつぶさに御覧になつたことと存じます。日の当りに見る我々は、その感激や、はかり知れないものがある。遠藤選手の揚げる日の丸を先頭に、緋色のユニホームを着た日本選手団は、六二番目に入場した。我々は夢

中で日の丸の小旗を振り続けた。スタンド、八万の群衆の熱狂振りについて、改めていうまでもない。一段と熱狂したのは、ミスカートの女子選手が入場の際だつた。美人国、フランスやイタリアチームがやってくる、人々は総立ち、前列が背延びするから、その後は、シートの上によじ登る。歓声、口笛、拍手、その後は、もう気が気ではない。「シエンタス、シエンタス（すわれ、すわれ）」と大声でどなる。一応はすわつても、女性旗手でも現われようものなら、もういけない。だからいつてすべての尺度が、ミスカートにあるわけではもちろんない。猛烈な声援を受けたのは、チエコチーム。「チエコ、チエコ、ラフラ」（チエコ、チエコ頑張れ）と大合唱。おなじみ、力持ちのジャポチンスキーを旗手に、手に手にメキシコの旗を振って入っ

てきたソ連チームだつたが、こちらには反応が冷たい。チエコに対するのは対照的である。アオザイの女性選手を先頭にしたベトナムには、ビーバー（万才）ビーバーベトナム、国際感覚もまた充分である。

日本チームには「アミーゴ」（友だち）の呼びかけ、「ハポンハポン、ララ」前開催国への親近感と、東洋の大国ハポンへの憧れか、小旗を打ちふる我々には涙が出る程うれしかった。途中で気がついたが、旗持参で応援に來ているのは、一五二カ国参加の中で日本とメキシコだけの様だ。

最後に、「サクラ、サクラ」のBGMの中で振袖姿の日本娘と民族衣装のセニリョータの出会いが演出の効果満点で素晴らしかった。

あけつぷろげで、卒直で底抜けで陽気な開会式。ラテンアメリカに初

めてやつて来たオリピックはだれが何と云おうが、完全に「フィエスタ」(祭)である。暑い汗をかかない。多分湿度が低いせいだろうか。紫外線がジリジリ皮膚に滲透していく様である。興奮さめやらぬ中に場外に出れば、我々一行はメキシコの群集にとりかこまれ「アミーゴ(友だち)、バッチのチェンジ、コインのチェンジ、旗をくれ」はてはサイン帳を持って追いかけてくる。うれしい悲鳴をあげてバスに乗り込む。尾松先生は会場でとられた旗を持ってサインしてくれと来た時にはあいた口がふさがらない様だったが、しぶしぶサイン。「これこそいかれボンチャ」とあきらめ顔。

夜は入場式の感激を反芻して皆上気している。在留邦人に間違えられて、記者につかまった先生、「OSS ポーツ社」ですがと旗を振っている

ポーズをとらされた女性等皆話題がつかない。又二日間同じ釜の飯をくったのと異国での結束力の為か、十年の知己の如く親密さを加えていく。夜は気の合った者同志、夜の散策に出かける。メキシコ自慢の四三階建てのラテン・アメリカン・タワーに行く。タクシーで一〇分もかからなかったが、町の中心部の位置するのだろうか、十時を廻っているのに賑やか。各国の観光団が続々と見学に來ているが、エレベーターを下りた途端、次から次へと、人なつこい目つきのメキシコ青年が寄つて来て「スペイン語が分るか」「シガリヨス(タバコ)をどうぞ」とか「ハポンは大好きだ」とか、入れかわりたかわり来るので五分と立っていられない。さすが百万ドルの夜景、絶景である。降りようということになつてやつと開放されたが、その後、町



メトロポリタン寺院にて

並を散歩した時、町角にタムロする青年男女はサイン、サインと追いかけてくる。全く大スターになった様なさっかくを覚える。選手団の一員と間違えられている様な気がするの、は私だけだったろうか。

帰路、しやれたティールームで入場

式のビデオを見る為立ち寄り今日の感激にひたる。

居合せた客も日本選手団がうつると拍手してくれるので、メキシコチームの時は聞き覚えで、メヒコ、ララと、一緒に手拍子をうち、夜の更けるのを忘れ、ホテルに帰ったのは午前二時を廻っていた。明日にひかえてベットに横たわる。

メキシコ編

十月十三日（日）晴

今日も快晴だ。そろそろメキシコボケで今日が何日で何曜日かそれも忘れる位だ。

水が変わり、食事が変わると体の変調を来たすのがほんとうだが、今日まで至極快調、家で患者や保険で追廻されている時の方が調子が悪くよく下痢をしたのに、こちらへ来てからは快眠、快食、快便、二、四〇〇米

の高原だというのに食事が美味しい。

今日は年前中市内遊覧で、パラシオナシヨナルのあるソカロ広場にと車は走った。向って大蔵省兼大統領執務室、左手はメトロポリタン寺院。どれも落ついた古風な十六世紀の建物である。昔のインディオ皇帝モクテスマ王宮跡だ。建物の一部、大蔵省に入るとメキシコの十四世紀以来の歴史を語る豪華なディエゴリーベラによる壁画があり、さすがに圧巻。見学が終って外へ出るとバラバラと絵ハガキ売りの少年が集って来た。そしてはつきりと日本語で十五ペソと言う。なかなか商魂がたくましい。スペイン語に弱い我々はそれにまどわされて買い求める。間もなく車はメルカードに向った。メルカード（市場で俗に泥棒市場とも言われ、日曜毎に開かれる青空ラクタ市場）は日曜日なので運よく

見られた。ガイド氏より決して買わない様にと注意されたが好奇心でのごき込む。ここでは、レフォルマ大通りに見られる近代建築とは対照的な厳しく貪しい一面が見られるが、日本の闇市の様な暗さがなく雰囲気は底抜けに明るい。マリアッチ（辻音楽）が演奏していた。トルテリイヤー（メキシコの常食でトウモロコシの粉を薄焼きにしたもので日本のお好み焼きに似ている）を焼いている所を通り、どんなものか買ってみた。一ペソで二〇枚も呉れ、食べると遠くで油くさく無味のものであり、これに自分の好みの物をまいて食べるそうだ。

又、バスに乗る。レフォルマ大通りは一名革命大通りとも言い、パリーのシャンゼリゼを真似で作ったと言われるだけあって道幅が広い。全長一三キロ。五、六〇メートル毎に

ロータリーがある。西から東へカルロス四世騎馬隊、コロンプス像、クワテモック像（アステカ最後の王）、独立記念の天子像、女神の像と噴水となり、チャペルテペック公園の人口になる。道は真直ぐで広く緑地帯には熱帯樹の大きさが十米おきに樹立し、舗道も日本の三倍位広いので歩きやすい。日本にもこんな道路が欲しい。

車を降り国立人類博物館に入る。ソカロ広場に近いモネダ街にある。古代アステカ、マヤ、テオティワカン、のピラミッドなどの遺跡が陳列されている。巨大な石の暦をはじめ、奇怪な石像、建物の装飾、珍しい記念碑など、造形的にも芸術的にも、すぐれた出土器が多い。

博物館の建築様式や設備は、日本の博物館ではとうてい足元にも及ばない程素晴らしい。

総体的にメキシコ人は建物といい、壁画といい、色彩感覚、芸術感覚がすぐれている様に思われる。二時間ではとても思う様に見られないので物足りなかった。全館を見るにはもう二時間位欲しいが、団体行動であるので又ホテルに戻り昼食。午後はスタジアムでの陸上競技に出かけた。入場式の時に比べると六分七分の入りだが活気がある。

我々の坐った位置からは、女子の走り幅飛びが一番よく見える。いよいよ待望の一万メートルの長距離に日本のホープ沢木、鈴木の出番がやって来た。（読者は当時の新聞、テレビに詳しく知っておられる事と思う）号砲一発満を持して走り出した。沢木、鈴木も先頭集団に交って健闘しているが、何か気がかりだ。前を通るたびに日の丸の小旗をちぎれんばかりに振り続け、「頑張れ、

頑張れ」ありつたけの声をふりしぼって声援、沢木、鈴木は聞えたのか大柄な外国選手団に交って懸命に走っている。六周目を過ぎた頃だろうか、我々の前で突然つまずいて転びそうになり、それがけちのつきはじめ、我々の声援も天に通ぜず第三集団から下位集団へと転落し、ゴールに入った時は選外だった。がっくり肩を落す応援団。しかし沢木、鈴木はベストを尽して最後まで頑張った。日本ではとても恥かしくて出ない様な大きな声が異国では平気で出るのも祖国愛と開放感が入り交っているせいであろう。

空気が乾燥している為か無性に喉がかわき、セルベツサー（ビール）やコーラを買っては飲むと売り子は日本の競技場と同じ様な学生アルバイトだ。向い側でやっていた百米の短距離で飯島が出場していたが、惜

しくも決勝で落ちたが我々の方からはつきり見えない。尾松氏は、競技場の通路をぐるぐると歩いてこの模様を8ミリに収めてきた。

夕闇せまる頃、競技場に出れば皆メキシコ色に日焼し、少々仏頂づらで自慢の日の丸の小旗も気がひけてまるめがち、どつと排き出された人波の為、来るバスも来るバスも満員、仕方なく通訳兼添乗員の大久保氏は、選手村に帰る空バスを交渉して一旦選手村までそのバスに乗せてもらい、選手村からあらためてホテルの近所まで乗る事になった。十分程で選手村に着くと、警備の巡査がニコニコしながらコインやバッジを手に手にチェンジしてくれと飛んで来た。やる物がないので五円玉をやったら、グラシヤス、グラシヤスと仲間にも得意気に見せびらかしていた。日本の警察では考えられないことだ。

オリンピックで賑わう目抜き通りを走るが、貧富の差が激しい。しようしやなスペイン風の家が続くかと思ふと、レンガに、トタンを乗せた様なスラム街がある。交通量は可成り多く市民の足はバスかウンペンタクシー。(市内の大通りは何処まで行っても一ペソで相乗りタクシー)地下鉄は二年後に完成予定であちこちで工事をやっている。アシタマニアナの国(あしたになれば何とがなるさ)で果して期日通り出来るやら?

ホテルに帰ったが、負けた日は足が重い。頭がフラフラするので自分だけかと思つたら皆一様にそうだと言う。多分高地で空気が稀薄なせいだろう。陸上は高地族が有利だ。

一風呂浴びて夕食を食べ、塩入夫妻、山崎さん親娘と私は夜の商店街にショッピングに出かける。殆んど

の店が七時に店じまいだから味けないが、昼間の暑さは何処へ、冷えびえして気持が好い。

十月十四日(月) 晴

今日は午前中はティオティワカン
の太場の神殿ピラミッド見学の予定
になっている。バスはクリストファ
ー・コロンプスの記念像を過ぎて立派
なインスルヘンテス道路(メキシコ
が独立した時の革命軍の名前)を真
直ぐ進んだ。途中バンコ(銀行)に
よつて、メキシコオリンピック記念
硬貨にかえてもらう。そばにメキシ
コ国民の総本山であるクワダルーペ
寺院(メキシコは九〇%までカトリ
ック教徒で産児制限は出来ず、子沢
山の家族が多く十人位の子持は珍し
くない)があり、参詣の人の波が絶
えない。女子は中に入る時、必ず頭
に布をかぶらなければならない、正
門からガラソまでは一〇〇米以上も



クアダルペ寺院

ある石だたみ。これをヒザで歩くのが信仰厚い人のしきたりだ。男はズ

ボン、女はスカートや靴下が破れ血がにじむのもかまわず歩いて行くのは、ちよつと異様だが、何かうたれるものがある。

テオチワカンのピラミッドは市の北方五〇キロにある。六〇八世紀にマヤ文明と同じ頃栄えた民族の都であつたが、アステカ族がこの高原を占拠した頃は外敵に焼き払われて廃墟となつていたと。

昔は、渺茫たる湖であつたといわれる広大な平野の中に点在するシャボテンや、地酒テキーラの原料である竜舌蘭の畠を見ながら飛ばしてゆくと、はるか彼方に太陽のピラミッドが見えてくる。その左右にやや低い月のピラミッドが見える。

太陽のピラミッドは高さ六五メートル底辺二二四メートルで、エジプ

トの大ピラミッドに匹敵し、一〇万立方キロもあるうかと思われる大量の石や煉瓦で積み上げられ、全体を添喰で蔽い着をした跡さえある。

石段は、頭上までつづき、頂上にはかつて生贄の生きた心臓をえぐり取つて神に捧げた神殿がある。石段を登つたが高地と年のせいか息切れがする。階段は二四四段であえぎあえぎやつと頂上に上る。頂上に立つて、強い風に頬をなぶられ、果てしなく流れる雲の行方を眺めていると、過去と現実のけじめを忘却、一瞬にして滅び去つたアステカ王国のかつての繁栄に思いを馳せる。

午後はオリンピックウエイトリフティングの応援のために、大分くたびれてきた日の丸を持ってインスルハンテス劇場に向つた。映画館を改造した競技場で、やはりメキシコ特有の壁画に被われた立派な劇場であ

る。(市内の劇場は全部国立で、料金は安く、どこも立派で、どぎつい看板や人目を引く物は何も置いていない)

会場に入ると煌々と映えた舞台は静かな中にも緊迫した空気が流れ、次々と逆三角に発達した筋肉美の各国選手が現われ、水を打った様に静かな見学席に選手達の息を整える呼吸音がとユウヒユウと聞える。いよいよフェザー級の「小さな巨人」三宅義信選手と弟の義行選手が出場、どちらが兄か弟か分からない程よく似ている。我々も汗ばんだ手で応援するが、昨日の陸上競技で声をつぶしているのと思う様に声が出ない。浪曲師の様なしわがれた声でどなるのだから皆の目が一せいにこつちに来る。光線の具合か三宅選手の無性ひげの顔が心なしか青白く見える。

途中、ロビーで偶然井口さんに出

会い、三宅の調子はどうですかと新聞記者の様な質問をすると、「それが昨日から兄の方が下痢をしており心配だ。弟の方は好調です」と懐しうに話し出した。「まあ頑張つて下さい。一生懸命応援しますから」と言うのとにつこりして老かんとくは控室の方に戻つて行つた。次々と脱落し最後に残つた三宅兄弟はよく頑張つた。

すると上る二本の日の丸に「君が代」が吹奏され始めると身体が電気に打たれた様にジーンとしびれ、思わず一しずくが頬に伝わるのを覚えた。大和魂を目のあたりに見た感激は遠く日本を離れていただけに余計強かった。我我一団は声をはりあげて合唱し、周囲のメキシコ人達も親しみの目で我々に拍手を送る。女性陣は目を真赤にして場外に出、足どりも軽くホテルに帰つた。

夜は岡山先生(名古屋の外科医)と尾松氏と私の三人でレフォルマ通リへ夜の社会見学探訪に出かけた。ポンビキ氏が声をかけるがあまり高いので相手にしない? マリヤ・イサベル地下のレストランでビールを飲み、さつと引き揚げた。

メキシコシティー編

十月十五日(火) 晴

昨日のウエイトリフティングに勝つて、皆上機嫌、元氣一杯で男子バレーボールの予戦の応援に出かける。メキシコ自慢のパラシオ・デ・ポルテス室内競技場、赤銅色に輝く巨大なドームだ。直径一六六メートル、高さ四三メートルあり、一九六六年十一月に着工、約二カ年の工期と九〇〇万ペソ(約二六億円)の工費がかかった。このいかにもメキシコ的な建物は、二万二三七〇人の収容人

員と二〇〇〇台の駐車場を誇っている。

会場に入ると日本対ポーランドの試合が始まったばかりだった。見ている中に試合は白熱化し、自分がプレーしている様に熱がこもり体がこわばり手が汗ばんでくる。連日の応援で男性軍は声を枯らしているのも女性軍は日頃のつましさを忘れて黄色い声をはりあげる。向い側からはNHKのテレビカメラが盛んに実況放送をしている。日本のカメラマンが写していると思うと心強い。

共産国の応援はいよいよ激しく、こちらにも負けてはいられない。いよいよ終盤戦に入ると、いても立ってもいられない。勇をこしてボーイスカウトの少年にジュステヤーたっぷりで、ウンポコ（少しだけ）とめくばせするとにつこりしてなわ張りをはずしてくれた。日本の選手団の真

上の放送席にもぐりこみ本物のカメラマンにまじって8ミリカメラで決定的瞬間を収める。少年に感謝をこめてムラチャス・グラシアスとくり返す。親目的なのか？こちらの強引さに負けたのか？前者としておこう。試合は一方的に日本の勝ち。晴ればれした顔で日の丸の旗を肩にのせ意気様々と表に出て記念撮影。選手団のバスにバンザイの連呼をあげせるが、何だか選手団はてれくさい様な顔をして日本人的スマイルを浮べるだけである。

ホテルに帰って昼食、午後は又陸上競技の応援だ。小休止して三時からの応援に出掛ける矢先、一天にわかにかき曇りザアという音と同時にスコールが降り出した。少し止んだ所でバス停まで出掛けたが、又降り出したので、中止となり、ホテルに帰り荷物の整理をして、夕方まで昼

寝を決めこんだ。六時頃在留邦人で尾松氏の知人の海老沢氏が車で迎えに来了。当地の日本語学校の校長をしている人で在留二〇年、スペイン語もペラペラである。市郊外にある海老沢氏の家まで二〇分程で着いた。ここはスペイン風の家が建ち並ぶ高級住宅街である。家に招じられると奥さん以下子供さんが嬉しそうに出迎え、故郷の話、メキシコの話と話題がつきぬままに久しぶりで御飯に味噌汁、漬物と日本の匂いをかきながら夕飯を御馳走になり、なごりがつきぬままホテルまで送ってもらった。間もなく、メキシコ大学歯学部で口腔診断学の教授をしている日系メキシコ人のドクター田中氏が、奥様（日本人）同伴で面会に来了。これも尾松氏の知人である。連れだつて近所のレストランに行きビールで乾杯、夜のふけるまで語り合った。

現在歯学部の子生は二千名で、診療器具は、米、独、スイス、日本と先進国から輸入しているが、日本製の評判は良い様である。明日は歯学部を是非見学してくれと言われたが、団体行動のため辞退してなごりのつきぬ間に別れた。

今夜もよく眠れそう。

クエルナバカ編

十月十六日

メキシコ市に別れを告げて、大型二階付きの貸切りバスでアカプルコまで長距離観光が始まった懐しき町並みを脳裏に焼き附けながらバスは一路、クエルナバカへのハイウェイを突走る。制限速度なしの素晴らしい道路が、かげろうの彼方に消えていく。

今日はあいにくの曇空で、有名なメキシコ富士といわれるポポカテペ

トル山（五七〇〇メートル）やイスタシワトル山（五七〇〇メートル）がはつきり見えない。エアコン付きのデラックス車は、高原の車影の少



クエルナバカの広場にて
物売りの少年少女

い直線道路を横ぎり、峠を越えてたんだんとひた走る。所々に羊の放牧が見える。

モレノ州に入り、クエルナバカに近づくと、道にそってあちこちにアフリカチューリップの真赤な花が咲き乱れて目にしみる。約一時間程でクエルナバカに着いた。シティと違って牧歌的で、インディオは体格と云い、日本人によく似ている。人類学的には東洋民族で今から一万五〇〇〇年程前、マンモスを追ってアリウシヤンからアメリカ大陸に入り、メキシコに定着したそう。ここは一年中温暖で標高一五〇〇メートル、一年中きれいな花が咲き乱れてシティ近郊第一の保養地でもある。一行の中二八名はホテルヴィラインターコンチネンタル、他の一〇名はホテルウノ・ドス・トレスと分宿になった。

ホテルというよりも保養地の田舎屋という感じだが、メキシコ色豊かなエキゾチックな門構え、平屋建築の扇型の家で芝生の美しい庭が広がる。我々の一行だけで満員の様な感じ。自動車の騒音もなく、人影も少く、インディオのメードが四、五人いるだけで久しぶりに固苦しさから開放されて、思い思いのラフスタイルでのんびりくつろぐ。

午後三時頃よりバスで市内遊覧に出かけた。ソカロ広場に行きコルテス宮殿の見学、中世紀の重厚な建物である。ここでメキシコの歴史を語る壁画を見るが、スペインの侵略ぶりが説明なしでもよく分る。メキシコは中年以上の国民約三〇%が文盲とか。その点、壁画は一目で分る仕組になっている。何処へ行っても壁画と原色の壁と花が目につく。

この辺は下町に属し、物売りの少

年少女が垢じみた服装で、はえのようになつて来る。しかし暗さはなく、人なつっこい。夕暮迫る頃、ホテルに帰り今夜はメキシコ政府の歓迎レセプションの予定だが、肩の張る所はお断りと変更し、このホテルの庭園で我々だけのパーティを行なう事になった。日もとつぷり暮れた頃から思い思いの服装をし、訪問着の盛装で出て来る女性もいれば、スポーツシャツだけのラフスタイルの人と雑多だ。

我々はシティで買った銀製のペンダントを首からさげて、日本では恥かしくて出来ない様なグループサウンズに似た姿で出る。ガイド氏自慢のテキーラのカクテルで乾杯。芝生一杯に広がってゴーゴーやフオークダンスに興じ、二組のマリアッチが交互にリクエストに応じて演奏してくれる。星は満天に輝き夜風が気持

良く、異国での開放感も手伝つて老いも若きも夢中になつて日頃の苦勞は全部吐き出し、本当に楽しい一時であつた。終りに近づいた頃、日系二世の中西サルバドル氏が夫人同伴で迎えに来た。日産自動車のクエルナバカ工場の重役で、たびたび日本に来てゐる。私は約一カ月程前に尾松氏の家で一度会つた人である。夫人は典型的なメスチーソのメキシコ人で日本人好みの美人である。

好意に甘えてホテルの裏側に当るスペイン風の閑静な家を訪問した。日本茶とおせんべいで日本の話、メキシコの話に打ち興じた。可愛い子には旅をさせよという事で小学校三年生だが、日本に留学さしている。尾松氏が「大へん元気だ」と話すと、やはり夫人は涙ぐんでいた。子を思ふ心は洋の東西を問わないと痛感した。間もなく夜のクエルナバカを車

で案内してもらおう。何処を走つても人影が少い。名も知らない公園の丘に降り立ち地理を説明してもらおう。町の灯を見てみると日本の丘に立っている様な錯覚さえ感じる。日本の特飲街の様な所に案内してもらったが、日本のナイトクラブの様な華やかさはなくわびしい感じだ。ここでもメキシコ人に間違えられて「ソイハポネス」というが、変な顔をしている。何かいい事をしたって？ まじめ人間には刺激が強すぎます。カクテルの酔が廻って眠くて仕方がない。中西氏にホテルまで車で送ってもらおう。ごそごそとベッドにもぐり込み朝までぐっすり。

タスコ編

十月十七日(晴)

芝生は朝露にしっとりぬれて静かである。毎日あくせく働いていた

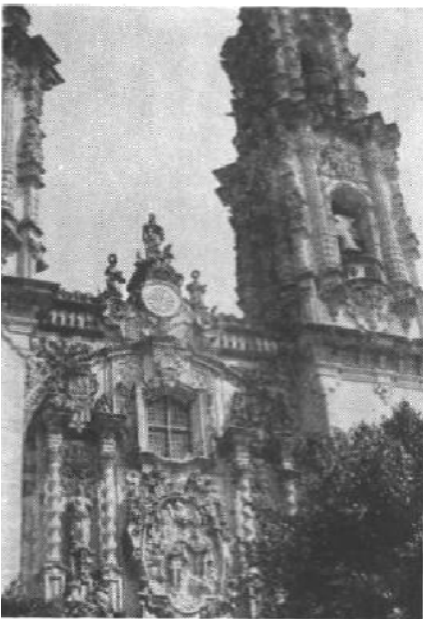
我々には素晴らしい朝だ。本当にすがすがしい。九時にタスコへ向けて出発。バスに乗ると米沢先生(長野)の知人と新井夫妻(在留十三年)が赤ちゃんと連れで乗ってこられた。

我々一行の為に世話しようというのである。道は二車線で、両側には小豆色の火山から堀り出された土が敷かれた歩道がついている。車は火山台地を通り、果樹園を過ぎ、

綿畑を経て、一直線にひた走る。途中、イグアナ(この地方に生息する大トカゲ)を持つた少年をモデルに写真のパチリ、食べると鳥肉に似ておいしそうだ、どうもグロテスクでその気にはなれ

ない。まもなく日ざすタスコの町が見えて来た。標高一七〇〇メートル、銀の町としても有名で建物は十八世紀につくられた古いスペイン風の家が山の頂上まで立ち並び、緑に囲まれた静かな町並、画家が見たら絵になる町である。バスから降り、銀製品の店で色々な民芸品を観賞、あれこれと買い求める。

曲りくねった狭い石だたみの坂道



タスコのサンタクルスタ寺院

をタタシーでサンタクリスタ寺院に着いた。この寺院は一七一六年ホセデラボルダが銀鉱を発見した時に寄附したものである。歴史の匂いがこもった素晴らしい寺院で、立派な壁画で被われている。

昼食はホテルザボルダですることになり、さすがタスコで一番のホテルだ。山頂のザボルダからはタスコの町が一望に見下せ、スペインの町に來たという感じで、丁度京都の都ホテルをクラシックにした様な感じだ。新井氏夫妻からのおにぎりとお卵焼きの差入れで、日本の味をかみしめ、又この料理もしつつこくなくおいしかった。

帰りにうとうとしながらクエルナバカのホテルへ戻る。好奇心のかたまりの我々は、夕食までの間、新井さんの案内で下町の見物に出かける。我々も相当日焼しているから町の中

を黙って歩いておれば、メキンコ人と間違えられそう。特に私は奥目で長顔だから本当に間違えられて困った。嘘のようなほんとうの話。スペイン語はポキト(すこし)しか分らない。夜はさすがに疲れ、再び中西サルバドル氏から招待を受けたが、尾松氏だけに行ってもらい、さらさらと吹く風の音を耳に夢路をむさぼった。

アカプルコ編

十月十八日

静かな異国の町クエルナバカに別れを告げ、純朴なウエイトレスや村人に手を振りバスはアカプルコへ向った。マンゴー壘を過ぎ交通量の少ない無人の境を突走る。維かがマイクに向ってお国自慢の民謡を歌い出すと、次々にのど自慢のオールドセニョルやセニョリータが歌うのは、日

本調豊かな明治、大正の歌や軍歌が主流で、若い人はフオークソングで大いに歌いまくった。窓外はロバに乗った現地人がのんびりこちらを眺めている。峠を越える頃からスコールが降り出し、皆うとうとし始める。単調なエンジンの音を子守歌に眠った。いよいよアカプルコに近づくと、亜熱帯らしく椰子の本が樹立するのが見え出した。雨も上がり、物置の様な現地人のみすばらしい住居が山のあちこちに建てられている。眼下には青く澄んだアカプルコ湾と高層ホテルが見えて來た。ちよつと見は熱海の様だ。三時三十分我々が泊まるコストロホテルに着く。メキシコシティーより苦楽を共にして來た底抜けに陽気なメキシカンの子ヨビひげガイド氏と、つきぬ名残りを惜しみつつ拍手で別れた。

車を降りるとむつと暑さが体に伝

わり、汗が背中を流れる。ホテルは湾を一望に眺められる様に建てられ、前は砂浜の水泳場になり、ヨットがここかしこに浮かんでいるが、泳いでいる人はほんの二、三人で、日本の海水浴場とは比べものにならないほどすいている。旅装を解くのももどかしく持参の海水パンツで一浴びし、やっと人心地がつく。灼熱の太陽と椰子の葉蔭、チリ一つ落ちていない白砂に寝ころんで何も彼も忘れる。聞くところによると十月から次の年の三月までは暑過ぎてシーズンオフとの事、涼しい時期が混むそうである。しかしに日本の海水浴場の様なことはなく、ゆったりしているそうだ。疲れるとホテルのプールで水遊びをし、夕方迄のんびりと過ごした。夜は晚餐会で一人一人が立って自己紹介をし、添乗員と医芸クラブ世話役の人々にお礼を述べ、中で

も、塙夫人の感涙にむせんだ言葉にはこちらも目頭をあつくした。

主人は体が不自由で決死の覚悟で出て参りましたが、皆様のお力添えで今日まで無事来られましたと。この美しい夫婦愛に一同感激に浸った。この様子を見ていたメキシコのインテリらしい青年が、英語でメキシコへ来た事を心からお礼を申し上げます。どうぞゆつくり楽しんで日本への良いおみやげにして下さい。グラシアス。ほんとに感激の一時でした。夜は椰子の繁った道を山崎親娘、米沢先生、大野母娘と野次喜多二人、それに途中から同行したアメリカ青年二人の団体で夜のアカプルコを散策。物凄く蒸し暑い。上半身裸になって歩いても汗が流れる。ホテルに帰って間もなくザーと云う音と共にスコールだ。隣が大久保さん、柳原さんの部屋、ドアをあければ通じ

るので、持参の日本茶と梅干で、日本に残したカアちゃんの話、身の上話と話題はつきない。スコールも止み、夜空に星が美しく輝き出した頃眠りについた。

十月十九日

九時三十分、軽装で出発。アロハにベンバーシユウズ、麦わらのソン



アカプルコのロケッタ島で。
タバコ売りのセニョリータと筆者と尾松氏

ブレロ、サングラスと現地人顔負けの格好でタクシーに乗り椰子並木の海岸線を波止場に向った。道幅が広く美しい。今日はオリンピックのヨットレースがあるので、万国旗や五輪のマークが良く目につく。空も海も紺碧で太陽は容赦なく照りつけ、百を越えるホテルが海に面した絶壁上にそびえている。日本の内海航路に就航している様な白い豪華船で、船内は原色のビキニ姿の各国グラマー美人で賑やか、どっちを向いてもウツシッシー。船はバンド演奏と同時に出航。船内と船外とまことに忙しく両方の景色に見とれているうちに、早速アメリカの坊やに話しかけ、隣のハイティーン美人の姉さんと一緒に写真をパチリ。やめられませんなあ。

船は三十分程して入江に入りＵターン。白いヨット、赤いモーターボ

ート、バナナの木と建物がマッチした美しい海岸線と、夢の様な船旅。高級別荘地帯を過ぎラ・ケブラダの断崖を見て、船は海水浴の出来るロケッタ島へ向って進んだ。この島はいかにも南洋の島と云う感じで熱帯樹が茂りエキゾチックだ。ここでメキシコ料理に舌づつみを打ち、タバコを売りに来たミニスカートのセニョリータと一諸にパチリ。一時間程で帰路につく。船の回りには現地人がカヌーで海産物を売りに来ている。船上ではボーイの留守を見て、大野さゆりちゃん（女子大英文科一年）はカウンターにもぐりこみ臨時バーテンをやり出した。日本の少女（向うでは本当に少女に見えるらしい）バーテンは爆発的な人気で長い行列が出来、白人も黒人もにこにこ。汗だくの奮斗だ。見ていても頬笑ましい。今日はメキシコ焼けに磨きがか

って黒光りする程に焼けた。ホテルで一休みして塩人夫妻、柳原君と我々は下町の探訪と買物に出かけた。その姿たるや、私はスリッパをひっかけ、尾松氏はバジャマに素足、まさに高級ルンペンの格好よろしくタクシーに乗りこみ下町へとばした。ごみごみした庶民の町で戦後の闇市の如し。夕方近いせいか露店からはトルティヤの煙や食物の匂いが重なつて独特の臭気が漂う。素足族も多いがどう見ても体裁が悪いので、ワラッチと云う御当地製の履物を買う。イグワナの剥製も日本円に換算して五、六百円で買えるほど安いので色々買物をしている間に日もとっぷり暮れ、あわててタクシーを捨ててホテルに帰ったが、夕食時間におくれ、ペコペコとあやまりやつと食事にありつけた。皆の目がお土産にうつり羨しそう。ちよつぱり得意顔に

なる。プールで一泳ぎして寝る。今夜でいよいよアカプルコもお別れか。

ロスアンゼルスへ

十月二十日

暑くはあったが、前日より良く眠れた。七時半起床、朝食がおいしい。ここは日本の様に磯の香りがしない。荷物の整理をして、メキシコ滞在最後の時間を名残り惜しみつつプールで一泳ぎ。十二時、貸切バスで空港に向う。ああ、これでメキシコも見取めかと思うと胸が熱くなる。アロハシャツの軽装でウェスタン航空の七九六に乗り込む。窓越しになつかしの山々や、海岸線に目をこらして、思い出を反芻しながら別れを告げた。アディオス・メヒコ、機内は冷房が効いていてやっと心地が着く。

今回は初編に述べた様に、アメリカ

カも思い出が沢山ありますが、メキシコにしばったために残念ながら割愛します。

二十一日はロスの見学、二十二日はパンアメリカンでハワイの観光と宿泊。二十三日なつかしの日本に向って出発、二十四日午後八時、無事羽田到着。

帰 国

十月二十四日

午後八時、小雨そぼふる羽田空港の定位置にびたり安着。申し合わせた様に無事帰国出来た事を喜ぶ拍手が起きる。ほっとした気持で、スチュワーデスに手を振りながら、タラップを降りた。長い廊下を歩くうちに気候の変化か、どっと疲れが出て来た様だ。いよいよ話に聞く税関吏のいる検問所が近くなり緊張感が体の中を走る。思い出のお土産がつま

ったバッグを受け取り、人の良さそうな吏員のところへ並ぶ。いよいよ順番が廻って来た。吏員はどう間違えたのか、オリンピックの関係の方ですかと聞かれたので、「まあそうです」と神妙な顔をしていたら、御苦労様と形式的に開けただけで三分もかからずにすんだ。早くここから脱出しなければとドアから外へ出て汗を拭く。やれやれ運が良かったわいと心の中で一人つぶやく。

出迎えの家族の方々が沢山来ている。先に出た大久保さんや、医芸クラブ関係者が心配顔で待っていてくれた。相棒の尾松氏がなかなか出て来ない。大阪までの航空券を買って行き戻って来たが、まだ来ない。いらしながら待つ。時間は刻々と迫まり、二週間同様に過ごした皆と別れの挨拶も何か名残り惜しい。ああ…… 尾松氏がやっと出て来た。

どうだった。いやーいかれた。大事な本を没収された。残念……。

我々と大阪の和田先生は九時半発大阪行の日航機で帰途に着いた。両手に持ち切れないお土産を抱えて、カアチャンや子供の待つマイホームへ急いだ。

我々にとつて生れて初めての海外旅行で、しかも日本の裏側にまで脱出することは大きな冒険を試みる様な気持ちで落ちつきませんでした。

朝焼けにかすむアメリカ大陸を見てやつと落ちついた様な次第です。

振り返ってみると、本当に楽しかったの一語につきます。

北は北海道から西は大阪までの見ず知らずの寄り合い世帯なのにすぐに打ちとけ、数日を経ずして十年來の知己の如き親密さが出来たのも異国での連帯感と、同じフライパンの

卵を食べたせいもあるでしょうが、皆がそれぞれ個性を持ち人格的にもすぐれた人達だからです。我々には大いに学ぶ所がありました。そして全国にまたがって親友が出来ました。今回の旅行が成功したのは、世話係の方々の綿密な計画と誠意ある配慮が、大きなウエイトを占めていることを忘れる事が出来ません。又事故者が一人も出なかった事も幸しております。

アメリカも勿論良かった事は間違いないありませんが、それにも増してメキシコが良すぎました。

メキシコと云えば、ソンプレロに口ひげにサボテン程度の知識しかありませんでしたが、この目で眺めたメキシコの何と素晴しかったこと。

しかし我々はセット旅行でメキシコの表面を一なせただけで、本当のメキシコを見るには期間も短い、

言葉も分らず余り大きな事は言えませんが、狭い国土であくせくひしめきあつて暮らしていた我々は人口密度の少い広々した広野は、何もかも忘れて開放感にひたれました。

体格も顔付きもよく似ている事も手伝つて、親近感もて、特にオリンピックの開催期間でもあつたせいか親目的で、人なつっこくすぐ友達になれる様な雰囲気でした。

日本人には間のびする程のんびりした国民性、もっと若ければ（今も若い）永住したい様な気持ちになりました。

今から思うと夢の様です。現実に戻ればあの時の笑顔はどこへやら、仏頂面で患者の応対に追われる生活。

しかし今度の旅行では、お金で買えない心の土産を沢山買う事が出来た事が最大の収穫でした。又、日本の良さを再認識しました。次のミュ

ンヘンには、もつと英会話を勉強し？又再会出来る日を楽しみにしております。どうか関西の漫才コンビをお忘れなく。

※(原文まま)

メキシコ旅情

遠い異国は メキシコの
ソンブレロに似た スタジアム
ゆれる日の丸 メヒコの叫び
ハポン ハポンの 手拍子に
歩むは日本の 選手団
今ぞ オリンピックの
聖火 燃ゆ

熟れたマゲイの 実も赤く
昔栄えし マヤの跡
インディオの ひげが頬笑み
テキラで サルー(乾杯)
高く奏でる マリアッチ
ああ、旅情に燃ゆる

メヒコの灯

きらめく星は 夜空にきえて
熱砂に寄せる 波白く
影をおとした 熱帯樹
一人テラスに たたずむは
濡れた瞳の セニョリータ
ああ、旅情ゆたかな
アカブルコ

思ひ出のメウ

クエルナバカの空青く
土の香りと白い壁
ブーゲンビリヤの花の下
一人はスケッチしてました
一人はカメラを向けました
一人はいねむりしてました
ほんとに静かな町でした
野を越え山越え車は走る

アカブルコへのハイウエー
皆が笑っておりました
皆が歌っておりました
ロバや羊やインデオも
皆が夢見ておりました

椰子の葉蔭に赤い屋根
南国の太陽はギラギラと
皆が黒くなりました
皆が仲間になりました
皆がメヒコに恋をした
親友よさよなら
さよならメヒコ

クエルナバカとタスコ

中橋 光男

今回のアメリカ・メキシコ旅行で、特に印象の深かった町はと聞かれると、私はクエルナバカとタスコを先ず第一に

挙げたい。

ホノルルも、メキシコ市も、アカプルコも、夫々に特徴あり魅力ある町だが、何故か私はクエルナバカとタスコに限りない魅力を感じた。

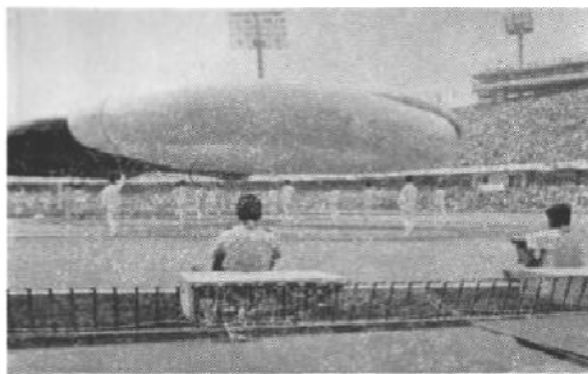
クエルナバカで先ず私を喜ばせたのはホテルだった。宏壮で、デラックスなホテルばかり経験して来た私連にとつて、平屋建で、而も樹々の茂った大きな庭を囲んで部屋のあるこのホテルは誠に寛いだ気持を抱かせるに充分だった。私の思い違いかも知れないが、HOTEL VILLA―の名前に正にぴったりの感じだった。又観賞用植物に多少興味のある私にとつて、大人二人でも抱え切れぬ位のデコラ種のゴムの巨木、一米以上もあるポインセチア、ゼラニウム、パパイアの木、コリウス、さては情熱的な「アフリカのチェーリップ」其の他数々の美しい花々に飾られたこのホテルの庭は限りなく楽しいものであった。然も朝とも

なれば、きれいな芝生の庭には黒い、尾の長い小鳥が陽光の下、囀りながら飛びかっついて如何にも長閑である。

ホテルの裏手に当る道を隔てて直ぐ目の前にカトリックの教会がそそり立っているが、朝夕七時頃ともなれば鐘をつく僧侶の姿がホテルの庭から眺められ、信者が坂道を登って教会に礼拝に行く様は如何にもカトリックの国メキシコらしい風景である。一方ホテルに沿った街路には真赤な五瓣の花をたわわにつけた「アフリカのチェーリップ」の並木が続き、その間に一際高く椰子の木が点在して遠い異国に來たという実感にじみ出て来るのである。

この町に來て、内心多少期待していたメキシコ政府主催のオリンピックパーティに出席を取止めて、このホテルの庭でパーティを開くとメキシコ人ガイドのラウル君が提言した時には一寸がっかりさせられたが、然しこの我々仲間丈

のパーティは結果的には却つてメキシコらしいムードに満ちた楽しいものになった様である。夕暮れと共に暗くなってきたホテルの芝生では、メキシコ人樂師の奏でる音楽に合わせて同行の令嬢や若い夫人達が楽しげにダンスに興じ、



オリンピック開会式風景



オリンピック競技場前の広場にて
(右 金成桂一先生・左 筆者夫人)

クエルナバカの夜を思い切り満喫しているかの様であったが、メキシコシティ以来歯肉の腫脹といったみに悩んでいた私は、この夜ラウル君調査するところのテキラカクテルに酔を覚える頃痛みは正にクライマックスに達し、たまりかねて部屋に駆け込むや、テキラとチャンギ



メキシコ人の子供と大とかげ

ーロングの酔による麻酔？を利用して遂に安全剃刀の刃で切開を自ら試みたが、膿瘍に達しないばかりか、手許が狂って上唇を切って鮮血が滴り落ち、妻をいたく心配させる仕儀に立至ったが、更に勇を鼓して今度は縫針で穿刺して漸く排膿の目的を果し安堵の胸を撫で下したが、お蔭で肝腎のパーティは時々部屋の外のベランダから眺めて楽しむ程度で終ったのは、返す返すも残念なことであった。

偕て私は、「オテル・ヴィラ・インテルナシヨナル」に余りに多くのスペースを費した様であるが、このクエルナバカの町自体も大いに気に入ったことは冒頭に書いた通りである。

モレロ州の一都会のこのクエルナバカは人口七万五千人と聞いたが、メキシコシティのお金持達の保養地とかで、成程高原の都会らしく空気清澄で、一年を通じて温度は摂氏二五度位とか。街は静かでする処に「アフリカのチューリップ」その他、色鮮やかな熱帯性の花々が咲き乱れ、静寂と自然を愛する私には永住の地ともしたい位の街の姿で、永住はとも叶わぬ夢ながら再遊の気持が湧然と起きるのを止めることは出来なかった。

さて、この町に着いた日の午後見学したコルテス宮殿の絵の様に美しい建物や、内部に飾られたデイエゴリベラ等拙く壁画などに就いても語らないのは片手落ちになることは承知しているが、丁

度この頃の私は例の歯痛と烈しい頭痛に悩んでいた時であった為、見学も上の空だったことを申上げて省略することを許して頂き、次のタスコにペンを進めることにしたいと思います。

十月十六日、メキシコ市から、クエルナバカに到着した私達は、翌十七日の午



ユニバーサル撮影所の西部劇牢屋のセット

前十時前にホテルを出発、大型バスでタスコ見物に出掛けたのであった。タスコ迄約二時間のバス旅行で、眼に入るものと云えば、山や畑ばかりであるが之が又、実に私にとっては嬉しい風景であった。水稻、玉蜀黍、砂糖黍、綿等の畑が何処迄も続き、農民や家畜が点在する丈で行き交う車も誠に少く、車と人と家に理まつている日本を思つて何とのびのびすることかと思つたことであつた。然し、



金門公園のシュトラウス像
(左から和田先生、千葉先生、岩本夫妻)

こうした風景の連続にいささかあきかかった頃、突然絵の様なタスコの町が遙か前方に見え始めた時は、思わず感嘆の声を放つたものである。

タスコの街は政府の命令で、スペインの植民地時代そのままの町の姿を伝えられているとはガイド君の説明であつたが、赤いスレート葺きの屋根、小石を敷きつめた狭い道路が特徴である。やかましい自動車のクラクションを鳴らす音も聞

こえず睡つた様に静かで、十八世紀のヨーロッパの町に迷い込んだかと思える位だ。

この町は銀鉱の町として有名であるが、銀鉱を発見して数年ならずして巨万の富を得たホセディア・ボルダの名を冠した「ホテル・ボルダ」は誠に美しいホテルで、ここのバルコニーからの素晴らしい眺めは言語に絶する位だ。必ずしもデラックスな



カイナマホテル横のコダックショウ

ホテルと云うのではないが、この町の環境に完全に調和のとれたホテルと云う可きか。とまれここも再遊の機会あらば二、三日ゆつくり滞在してみたいホテルであり、町ではあった。

タスコの町でもう一つ書き落す訳に行かないのはサンタプリスカ寺院である。この教会はボルダが銀で巨富を得



フラダンスのブリマと筆者

このタスコ見物に同行されたクエルナバカ在住の邦人夫妻（お名前は申訳ないが失念からお握りや漬物の御馳走になつて遠い異国の味を味わわせて頂いたことに對し心からの謝意を表したい。

いやもう一つ忘れてならないのは、主催者側の御好意で予定になかったタスコ見物をさせて頂いたことである。本当に有難う。

（写真 中橋フミ）

※（原文まま）

た幸運を神に感謝して寄進したものと云われるが、このメキシコの代表的なバロッタ建築と云われるサンタプリスカ寺院は、この町では一際高い建築物で、そのスケールの雄大さ、その荘厳さは瞠目に値する。只、内部を拝観出来なかったのは心残りであつたが。

こうして私達は楽しいタスコ見物を終えて夕刻満ち足りた気持で懐かしのクエルナバカに帰つて来たのであるが、

『春のシャンソンの夕べ』

開催

—古坂るみ子コンサート—

白矢 勝一

当クラブ洋楽部会員の古坂明弘先生の実姉で、プロのシャンソン歌手でいらつしやる古坂るみ子さんのコンサートが東京都小平市にあるシラヤアートスペースにて開催された。

2015年4月18日（土）17時からピアノをバックに純白の衣装で登場された古坂るみ子さん。会場には古坂明弘先生を始め、同じ洋楽部の奥村 秀先生もかけつけた。コンサートの始めに奥村先生から、古坂るみ子さん、古坂明弘先生のご両親が紹介され、才能あふれるご兄弟を育てられたご両親に拍手が送られた。

その後、公務の忙しい中、駆けつけてくださった小平市市長の小林正則氏からの挨拶をいただき、コンサートが始まった。

煌びやかなオーラを身に纏い、古坂るみ子さんは『バラ色の人生』『さくらんぼの実る頃』など数曲を熱唱された。来客者の横を歩きながら歌われたり、微笑みかけたりしながらの歌唱に来場者は魅了された。

続いて古坂明弘先生が唄を披露され、古坂るみ子さんとのデュエットも披露してくださった。

来場者みんなで歌えるようにと、歌詞が配られる配慮がされ、会場が一体となつてのすばらしいコンサートとなった。

恥ずかしながら私も、本日の進行を務めてくださった玉澤明人氏とともに、ギターを奏で、唄を披露させていただいた。会場の暖かい雰囲気にも包まれながら数曲歌わせていた

いた。

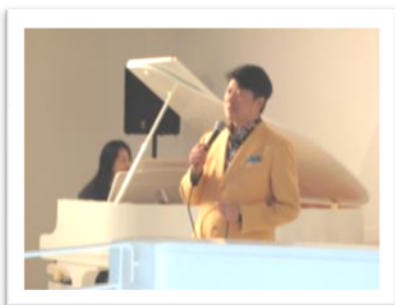
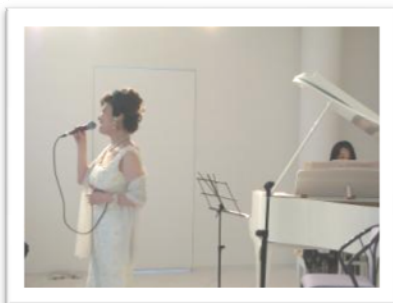
第二部として、軽食やおいしいワインなどを飲みながら、歓談したり、飛び入りで唄を歌ったりと、なごやかなひとときとなった。古坂るみ子さんも参加され、来場者と気さくに話してくださった。

たくさんの笑顔と素敵な音楽につつまれ、贅沢な時間を過ごさせていただいた。出演者、来場者、コンサート開催を手伝っていただいたすべての方々に深謝である。

古坂るみ子さんご紹介

東京都出身。「ハムレット」で初舞台。国立劇場で「オセロ」のデズデモナ役で出演、文学座新人賞を受賞。1989年4月に有楽町朝日ホール2日間芝居形式の初リサイタル「ダリダの生涯」を開催した。1995年9月及び2003年の9月に、草月ホールにてリサイタルを行い、そのライブのCDをそれぞれリリース。

2013 年コンサート「懐かしい恋人たち」
 を開催、3 枚目となるライブCDを発表。
 現在、舞台出演のかたわら、都内のシャ
 ンソニエ、ライブハウス、全国各地のホ
 テル、デイナーショー等に出演している。



戦後七十年

老医師と主婦の歩いた

『続々 玉砕の島 サイパン』

美濃部 欣平

美濃部 幸恵 著

本誌で連載中の『生還！バンザイ突撃に参戦した軍医中尉』をまとめた一冊。

『玉砕の島 サイパン』の第三段。



美濃部夫妻が実際にサイパンで撮影した写真を豊富に掲載。戦跡をたどる哀しくも美しい島サイパン。



戦後70年となりました。

このリーフレットは、私たち夫婦が玉砕の島サイパンの戦跡をめぐる3冊目の随筆です。

今回は「最後の総攻撃」に参戦し奇しくも生還された海軍軍医中尉の戦記をもとにサイパン島での経路をめぐりました。

サイパン奥地の戦跡は年月の経過と共に関係者も高齢化し、訪れる人もまれになり風化していこうとして居ります。やがてジャングルに包まれて沈黙するか、又は個人の所有地となり宅地開発され戦跡も少しずつ姿を消そうとしております。

サイパン玉砕より71年、拙い文章

写真で恐縮ではございますがページをめくっていただき、激戦地の過去からの声をお聴きいただき多くの将兵、島民の地獄の辛苦を思い起こし追悼していただければ、幸甚でございます。
【ごあいさつ より】

(株)タウンニュース社

会員の著作を紹介する欄です。
近著を事務局まで送って下さい。





【文芸特集号 執筆者募集】

(一) 内容は自由

(二) 枚数に制限はありません。

一行 24 字詰め×22 行 2 段組
が基本の 1 頁です。

(明朝体 11 ポイント)

※ルビがついたりすると変わ
ります。

(三) 頁負担金 1 頁千五百円。

ただし、詩や短歌は 1 頁千円。

(四) 雑誌購読 予価五百円。

執筆者一人二十部以上。

(できるだけ多くの部数の購
読をお願いしています。)

文芸特集号は発行経費を執筆者で
割り、負担していただいています。

執筆の希望者が少ないと発行できな
いこともございます。まずは、別送
いたしました、『二〇一五年 文芸特
集号 執筆者募集のお知らせ』をお
読みになり、ご希望の方は、申込書
に記入の上、事務局までお送りくだ
さい。

申込書の締め切り

八月二十日(木) まで

原稿の締め切り

九月十七日(木) まで

皆様のご参加、お待ちしております。

※通常の年 4 回発行の機関誌も近年、
原稿の集まりが思わしくなく、発行
が危ぶまれる号も度々ございます。
現状からみて、今年度の文芸特集号

の発行は大変厳しいものと思われま
す。ご考慮いただけると幸いです。

【事務局夏季休暇のお知らせ】

事務局は左記の日程で夏季休暇を
いただきます。よろしく願いいた
します。

日頃から電話など、つながりにく
く大変ご迷惑をおかけして申し訳ご
ざいません。

平成 27 年 8 月 6 日(木) から

8 月 16 日(日) まで

今後ともどうぞよろしくお願いいた
します。

透視像



初芝 澄雄

何時か透視像に書きましたが、私は田舎に行くのには新宿駅から千葉駅まで電車を利用するのですが、今までは新宿から御茶ノ水駅まで、急行電車に乗り、ここで千葉行きの急行に乗り換えていました。ところが東京駅から、成田空港行きの電車が新設されたので、住居の中野坂上から東京駅まで、直通の地下鉄電車に乗り、東京駅から成田行きの新設の電車に乗り換えて、千葉駅に行く事にしました。その時によりますが、成田行きの電車は一時間に数本発車しますので、千葉駅に行く乗車時間が非常に早くなったのです。始めの成田行きの頃は千葉駅には停車

しなかったのですが、地元民の希望で多くは千葉駅に途中停車をするようになりました。私の住む中野坂上からは一本の地下鉄が東京駅に直行します。私が出てから、成田空港行きの電車に乗るために、今までの電車通とくらべて、非常に早く千葉駅に着く事が出来るようになりました。

普段は中野に住んでいるのですが、毎週のようにこのコースを用いて、千葉市の生家に行きますが、この電車を利用すると非常に便利になりました。田舎に特に仕事もないのですが、毎週両方の家の雑事をしており、田舎の方の近所の人々と会えるようになりました。田舎の生家の方に人が少なくなった現在では便利です。

編集後記



本誌編集作業のこの時期、東京は梅雨真っ只中です。しかし今年は例年と比べて『雨』というより『湿気』に悩まされているような気がします。雨が降らない日でも湿気が多く、暑いのか、肌寒いのか、なんとも言えない陽気です。西日本は豪雨が多いとニュースでやっていました。雨による色々な被害も出ていると聞きます。皆様の地域は大丈夫でしょうか。さて、今年もまた『文芸特集号』の原稿を募集いたします。近年原稿集めが非常に厳しい文芸特集号です。是非、ご投稿をよろしくお願いいたします。詳細は同時期に別送いたしましたご案内をご覧ください。暑さに負けぬよう、お体ご自愛くださいませ。

(ES)